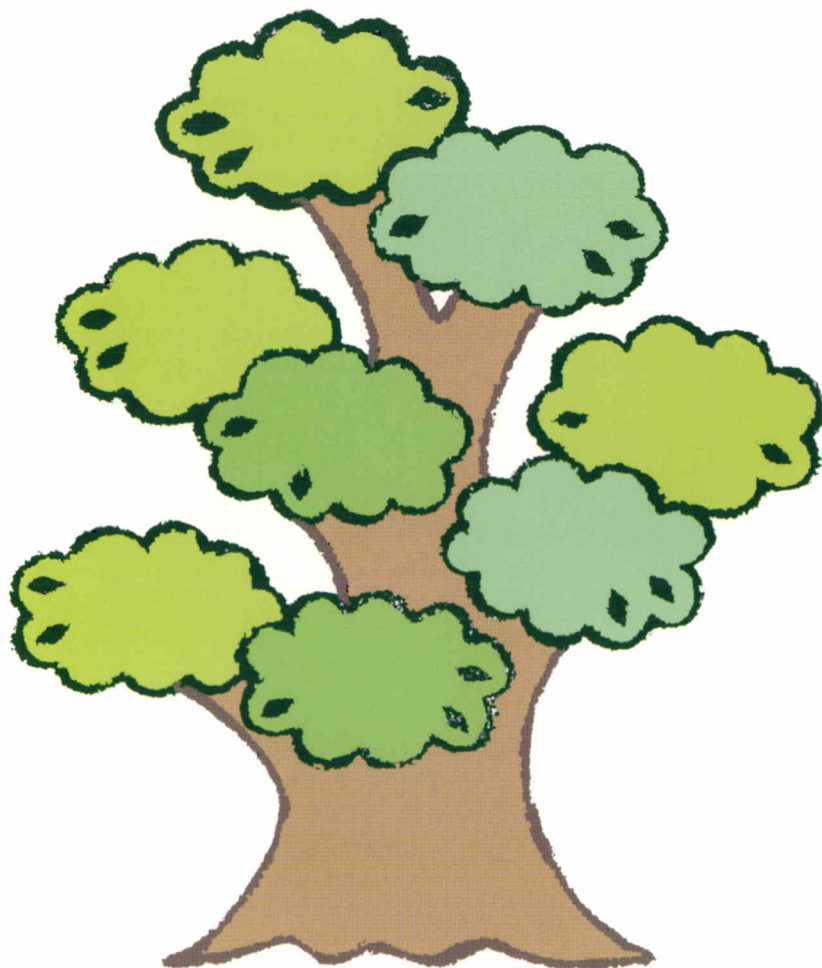


神の民  
LAOS講座 第8号

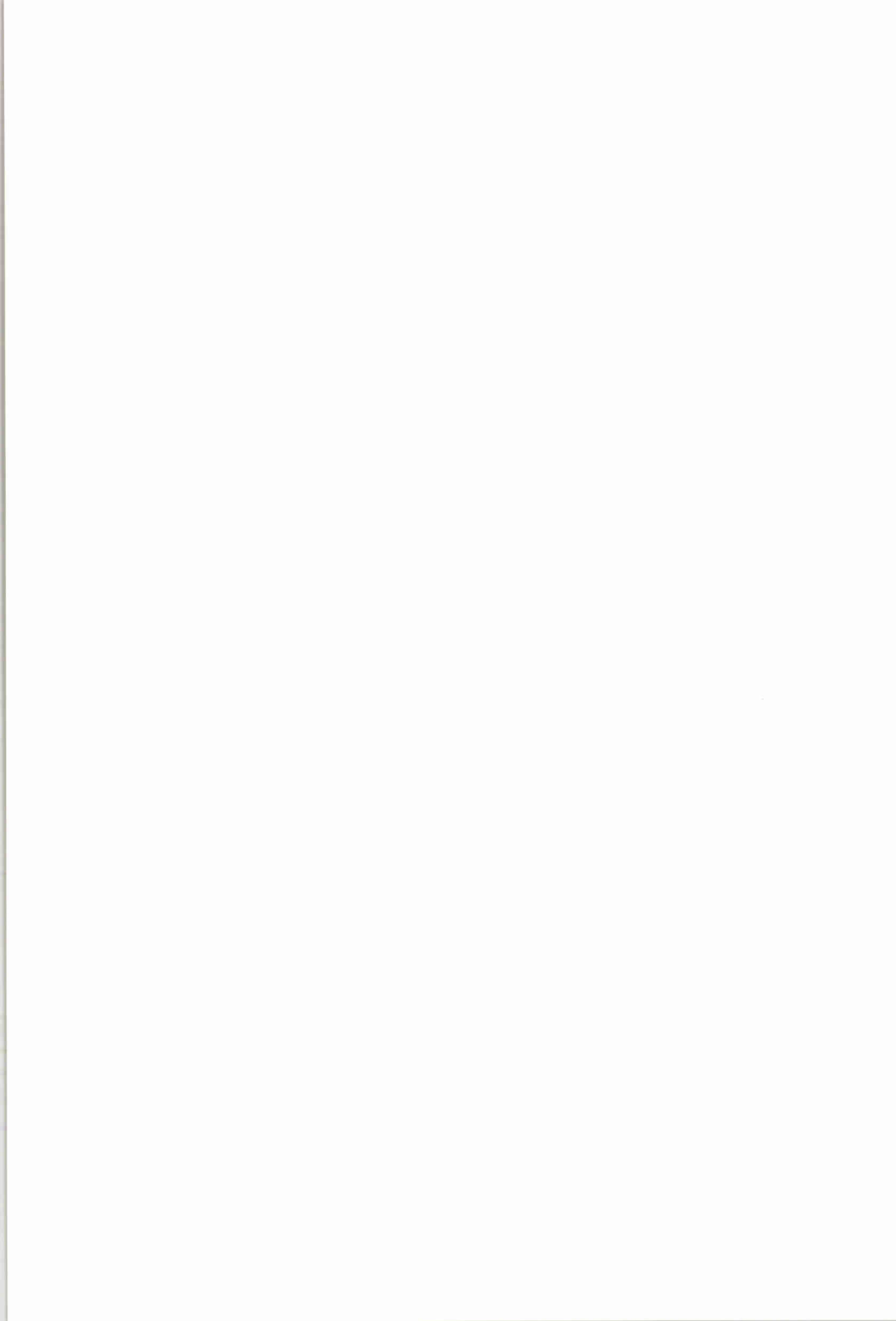


# この世を生きる

— キリスト者の生活 —



日本福音ルーテル教会



# 神の民 LAOSの樹

## ⑧「世界」の中のキリスト者

家庭と職業への召命  
キリスト者と生命倫理  
キリスト者と社会問題  
人権・正義・平和・環境保全  
情報化/グローバル化

## ⑦宣教と奉仕の理論と実際

教会は「宣教共同体」  
神の民・「信徒と教職」  
宣教と奉仕の具体像  
牧会的カウンセリング  
教会のディアコニア

## ⑥信仰継承

旧約聖書に見る信仰継承  
小児洗礼と親・教保・教会の役割  
堅信教育モデル  
教育カリキュラム  
祖先と死者の記念

## ③教理問答・諸信条

小教理問答書の展開  
アウグスブルク信仰告白  
ニケア信条と教会再一致  
義認の教理とルーテル教会  
日本の社会・文化の中で  
信仰を告白すること

## ⑤教会の歴史

初代教会の歴史  
宗教改革の展開  
現代教会の流れ  
JELCの歴史  
自分の教会の歩み

## ②説教の聴き方・語り方

聖書日課(バリエー)の意味  
説教の主題発見  
説教の構成と表現  
霊的な奉仕への召命  
説教の展開としての牧会

## ④「聖書」とその読み方

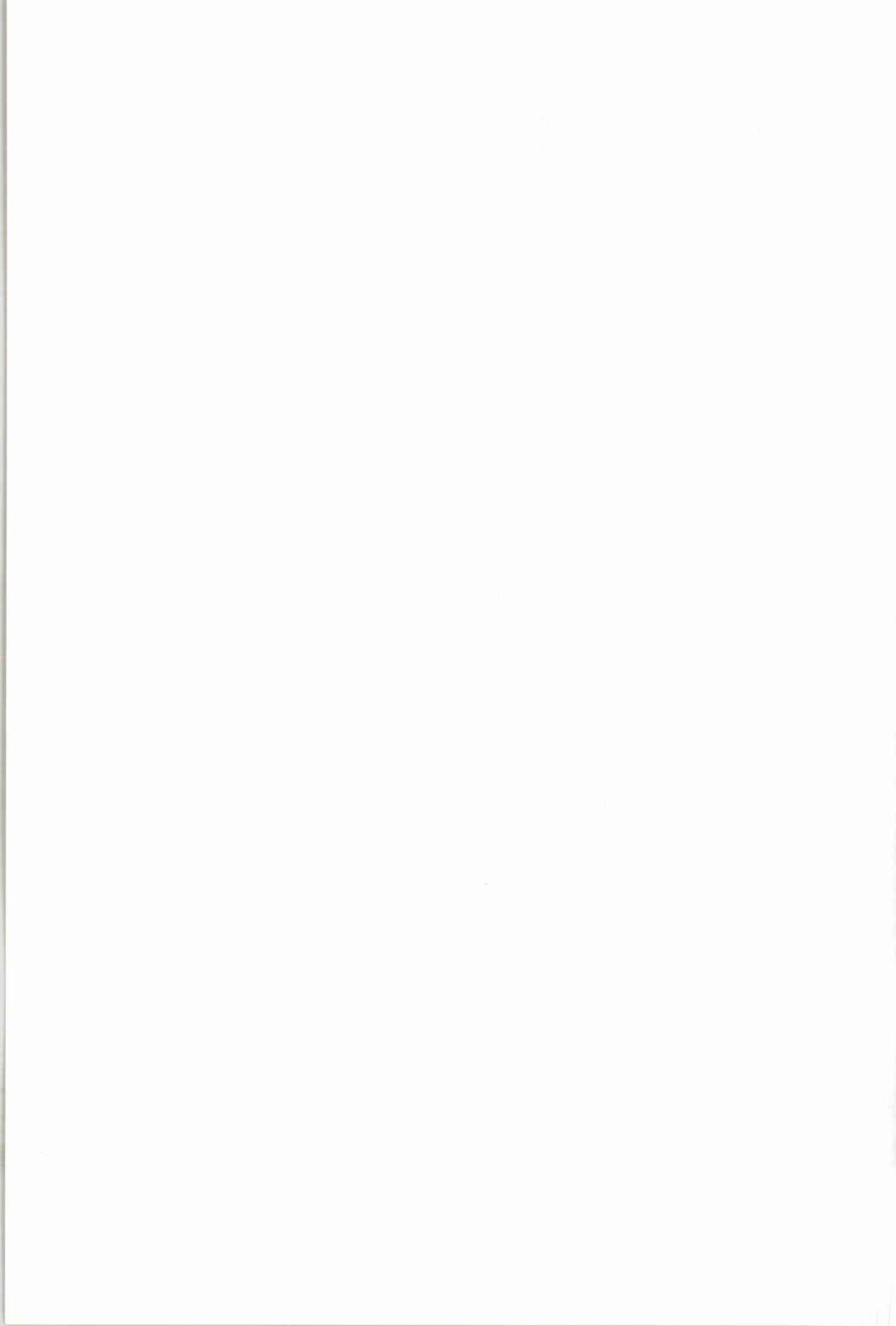
「聖書」の読み方  
救いの歴史の道筋  
聖書の各書を読む  
聖書とその周辺  
「私」の聖書ノート

## ①礼拝の意味と実践

教会は「礼拝共同体」  
教会の暦と礼拝  
礼拝と音楽・会堂建築  
式文の構成と会衆の参加  
公同礼拝の司式者の役割

祈り・聖書

宣教共同体  
家庭と社会  
礼拝共同体



# も く じ

<b>第一部 キリスト者の生活 理論編</b> .....	4
<b>第1章 キリスト者にとっての職業・家庭・コミュニティー</b> .....	4
1. 職業.....	4
2. 家庭.....	9
3. コミュニティー.....	16
<b>第2章 教会と祈りの生活</b> .....	23
1. キリスト者を召し、生かし、送り出す教会.....	23
2. 送り出された信仰者の祈りの生活.....	29
<b>第3章 今日の諸問題</b> .....	38
1. 生命倫理.....	38
2. 環境の問題.....	43
3. 宗教と「戦争と平和」.....	45
<b>第二部 証言集</b> .....	49
(ア)職業人	
▶ 会社=谷口輝男(京都教会).....	50
▶ 教育=谷口恭教(大江教会).....	52
▶ 行政=増島俊之(本郷教会).....	54
▶ 芸術=山崎種之(松本教会).....	56
▶ 農業=鈴木勇也(浜名教会).....	58
▶ 医療=原 仁(武蔵野教会).....	60
▶ 福祉=原田恵美(小石川教会).....	62
(イ)家庭	
▶ 家族(夫婦・子育て)=俵恭子(室園教会).....	64
▶ 老親の介護=安喰栄子(釧路教会).....	66
▶ 死の看取り=田坂 宏(武蔵野教会).....	68
▶ 障がいを持って生きる子と共に=中本秀行(挙母教会).....	70
(ウ)コミュニティーに生きる	
▶ 新しいコミュニティー=赤間峰子(市ヶ谷教会).....	72
▶ 地域社会での貢献=加藤俊鋪(健軍教会).....	74
▶ 少数派・差別との戦い=森本典子(釜ヶ崎ディアコニアセン ター喜望の家).....	76
▶ 世界の広がりの中で=松木 傑(聖パウロ教会).....	78

# LAOS 講座へのお招き

## 信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう

### 信徒としての成長を

キリスト者として生きようと決心しました。それは、イエス・キリストを通して神さまから与えられた十字架と復活の福音を信じ、洗礼を受けて、教会の交わりの中に入れていただいたからです。求道者会、洗礼準備会での熱心な学び、兄弟姉妹に見守られながらの洗礼式でのあの感激を懐かしく思い出します。あの時言われた言葉、「洗礼はゴールではなく、スタートですよ」もまた忘れられません。しかし、その後の今日に至るまでの信仰の歩みを振り返るとき、聖書についても、信仰者としての教会と社会の中での生き方についても、もっともっと学びを深め、実践していきたいと思わないではいられません。—これは、多くの教会員の方々に共通する思いではないでしょうか。信徒としての成長、このことは自分自身にとっても、また教会にとっても、非常に大切なことです。

### ルーテル教会としての決心

私たちが属する日本福音ルーテル教会（JELC）は、「福音に生き、社会に仕え、証しする」をスローガンとする、「JELC 宣教方策21」（パワーミッション21、略称 PM21）を2002年5月の総会で採択しました。福音に生かされて生きる。社会に仕え、そこに住む一人ひとりに仕える。十字架と復活の主イエス・キリストとその恵みとを大胆に証しする。そういう教会、そういう信徒になろうと教会全体で決意したのです。

全体教会の方策は、個々の教会で具体化されることではじめて実を結びますし、個々の教会でということは、一人ひとりの信徒が兄弟姉妹みなと共に手を携え、祈りを一つにしながらか、実践していくことで本当の形をとります。「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」（ガラテヤ4:19）、その日までともどもに信徒として成長していきましょう。パウロはこうも言っています、「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」（フィリピ3:12）。

## LAOS (ラオス) として

PM21の第二プロジェクト(P2)の目標は「証しし、奉仕する信徒になろう」です。そこで検討の結果、そのような信徒になっていくために、信徒としての受洗後の教育、生涯かけての成長のための教育のプログラムを用意しようということになりました。そして、それを「LAOS講座」と名づけました。LAOS(ラオス)、それは、新約聖書が書かれたギリシャ語で「神の民」(ラオス・セウー)という言葉の「民」という言葉です。わたしたちは神の民、信仰の共同体、礼拝共同体、宣教共同体です。そのなくてはならない一員です。この講座の特徴は、個々の信徒の内的、霊的成長というのに留まらず、むしろ共同体の中で、共同体と共に成長する教会的信仰また生き方を目指している点です。LAOSという言葉から英語の信徒 laity という言葉もできたのですが、この講座は信徒こそ教会の中心であり、教会そのものだという考えに貫かれています。

### 証しし、奉仕する信徒になる

「証しし、奉仕する信徒」になっていくためには、知的な学習をすればそれで十分なわけではありません。この「LAOS講座・第一期」でキリスト者としての基礎的な知識を習得したあと、さらに「第二期」で、より実践的な学びをして「証し」と「奉仕」を生きていく信徒へと成長していきましょう。そのためには、既存の書物から学ぶというだけでなく、実際にそのような生き方をしている兄弟姉妹からも積極的に学んでいきたいと願っています。

### 教会の輪の中で

「LAOS講座」の第一期の学びは別掲の「LAOSの樹」にそのカリキュラムが載っています。その冊子を継続してご購入いただき、教会の諸集会で、学びを進めていってください。成果を分かち合い、そこで得たものを生活の中で生かし、足腰の強い信徒になっていきましょう。

2006年5月

日本福音ルーテル教会宣教方策21 (PM21)  
プロジェクト2 (P2) 委員会

## 第一部 キリスト者の生活 理論編

### 第1章 キリスト者にとっての職業・家庭・コミュニティ

この第一章では、私たちが生きること、生活することを信仰の目でもう一度捉えなおしていくことをねらいとしています。理想的な、あるいは模範となる信仰者のあり方を示そうとは思っていません。聖書から学びながら、現実の私たちの問題に寄り添うものとなるように願っています。

そのため、ところどころ歯切れが悪いところがあるかもしれません。ただ、そう思われたところに私たちが直面している困難な現実があるのだと思います。その現実の中で神様のどういうメッセージを聞いていくべきか、よく考える必要があるということだと思ふのです。

#### 1. 職業

IIテサロニケ3:10

「働かざる者食うべからず」と言われるように、働くということは生きていくための基本で、当然のことだと思われるかも知れません。けれども、労働とは何かということについては、実に多様な理解があります。例えば古いギリシャ文化の考えでは、人間の理想はあらゆる労働から自由になることで、働くということにはあまり価値を置いていません。ですから、いわゆる「労働」は奴隷の仕事とされ、仕事から自由な余暇を生きる自由人であることを価値あることと考えています。つまり、それぞれの文化・社会によって「職業観」というか、働くこと、労働することについての考えはさまざまありうるのです。

## ●聖書から

それでは、聖書はいったい「働くこと」、「労働」ということをどのように語っているのでしょうか。

創世記1章28節には、神様が人をお造りになられた時に最初に言われた言葉が記されています。

創世記1:28 「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。」この「従わせる」という言葉は、その対象を思うがままにして良いということでは決してなくて、むしろ、神様の創造された世界を「守る」という意味で言われています。また、

創世記2:15 同じ創世記2章15節には、神様がエデンの園に人を連れてきた時、「人がそこを耕し、守るようにされた」ということが記されています。神様が人間をお造りになったのは、神様の創造された世界を耕し、守る者を必要とされたからなのです。

つまり、神様は人間をこの世界で「働く者」「労働する者」としてお造りになられたと、聖書は語っているのです。ですから、労働は単なる義務でもなければ、楽しみでもありません。また、できればこれを避けて余暇に価値を見出すべき性格のものでもありません。むしろ、「働くこと」は人間にとって本質的なことであり、神様が私たちをお造りになられた目的なのです。

創世記3:19 もちろん、罪に落ちた人間は、この「労働」に苦しみが伴い、また、神様から離れているならば、どんな働きもむなしいものと感じられてしまうことを聖書は隠しません。

コヘレト2:11

しかし、むしろその苦しみによって、私たちは働くことや生きることは、神様を求めなければならないことを知らされます。神様が私をお

造りになられたのには、神様のご計画、目的があるのです。なんとなく私がいて、どうでもいい人生が与えられているのではありません。私はなぜ生まれてきたのか。苦しみや悲しみの中に生きるときにも、その答えはただ神様のみこころを求めることにのみ見出されてくるはずで  
す。主とつながっていることが、私たちの実りを  
確かにするのです。

ヨハネ15:5

## ●ルターの召命観

ルターの「小教理問答」を見てみましょう。使徒信条第一条の「創造について」の解説には、次のようにあります。

「わたしは、神がわたしをすべての物とともに造られたことを信じます。わたしは神がわたしに、からだと魂、目と耳と両手両足、理性とすべての感覚を与えられたこと、今もなお保たれることを信じます。そのうえに神は、着物とはき物、食物と飲み物、家と屋敷、妻と子ども、田畑と家畜とすべての財産とを、体と生活のために必要なすべてのものともども、毎日豊かにあたえ、あらゆる危害から保護し、またすべての悪から守り、防がれることを信じます。」

ルター『小教理問答』  
使徒信条の解説

これを見ると、神様の創造の業が私たちに必要な全てのものを与えられることを告白しています。そして、実は、それらのものが私たちに与えられるためには人間の働きが含まれてくるのです。つまり、神様はこの世界に生きる一人ひとりへのいのちを与えるために、他の人の働きを用いられるというわけです。ですから、私たち人間の「労働」は、単に創造された世界を守るということではなく、神様の創造の業に参加することでもあるのです。

労働そのものに対する積極的な理解は、ルタ

一のベール（召命としての職業）の思想によるところが大きいといえます。中世では修道士になって聖なる働きに従事することが神様の前に価値のある働き（功績）と理解されていました。しかし、ルターは聖も俗もなく、この世のすべての働きにおいて私たち一人ひとりが神様の創造された世界と人々に奉仕するものとして召されていると教えたのです。牧師の働きだけが神様の前に尊いというわけではありません。この世でのすべての働きが、人間の生活とこの世界全体を支えるように神様によって用いられ、尊いもの、聖なるものとされるのだと理解されたわけです。

だからこそ、私たちのそれぞれの職業が、どのように神様のみこころの中にあるものなのか、どのように自分の働き（労働）が神様の世界に用いられているのかをたずね求めていくことが必要だと言えるでしょう。神様が自分の働きに何を求めておられるのか。それを私たちはみことばに聞いていかなければなりません。

## ●今日における職業の 問題



私たちはルターの時代とはまったく違った時代に生きています。今日、日本では第三次産業の占める割合が65～70パーセント近くを占めるまでになりました。ですから、私たちの働きの多くは直接に生活のために必要な物を生産することではなく、その流通やサービスの分野での働きとなっています。産業・経済の大きな仕組みの中であって、私たちの働きはその一コマ、部分的なものにしかすぎません。

大きな企業の中では、自分の働きは細分化した中のひとつの歯車であって、その全体を把握することは難しいものです。私たちの「労働」

は極めて抽象化してしまっていて、自分が働く意味を見出しにくくなっているのです。

一人ひとりが自分の職場で忠実・熱心に働いていても、その企業自体が不正をしていたり、公害をもたらしている場合もあります。また、日本の食品需要と輸入産業が、対価として東南アジア諸国に大きな輸出産業を生み出して、その国に利益をもたらしているように見えます。しかし、実際にはその国の産業の構造を無理に変えてしまい、また、自然を破壊し、さらには、低賃金で何の保障もない多くの人々の生活を貧しいものにしてしまっているという現実もあります。

私たちは、現代社会の中で自分が関係した働きの結果が、社会や人々に良いものだけを提供し得ていると断言できるのでしょうか。また、自分の働きとしては適切な対応であっても、ある人を傷つけたり、切り捨てなければならない現実も出てきます。助けたいと思っても、働きの限界を感じることもあるでしょう。

ですから、今日の複雑な社会の中では、私たちは単に自分の職業の場だけで、自分に対する神様からのこの世へのコール（召し）を考えることができないことは明らかです。むしろ、社会全体に目を向けて、職業を超えたところでも自分の働きや役割を見出すことが大切になってきます。そこでは、たとえばキリスト者としての倫理的な判断が、自分の個人的な労働や生活態度を決めるということにとどまらず、社会全体がどのような方向に進んでいくのかということに責任をもたなくてはならないはずです。

そうした現実においては、職業は生活の資を得るためと割り切り、私生活において自分らし

い生活を創造する、あるいは職業とは別にボランティアやさまざまな社会活動に関わっていくという可能性も考えられるでしょう。教会を中心とした活動を担っていくことも大事な意味を持ってきます。

そして、もう一つ大切なことがあります。私たちはそれぞれの「職業」、「労働」において社会全体に結びついていくのですが、その基礎は家庭にあるということです。だから、その家庭を支えていく「働き」を、あたかも社会から切り離されたことのように考えるべきではありません。そこにも大切な、神様からのコール（召し）があるので、私たちがそのことにも積極的に答えていくべきことを忘れてはならないのです。家庭を犠牲にして自分の「仕事」だけに身を捧げることは、必ずしも自分への神様のコールに忠実であるという証しにはならないのではないのでしょうか。

## 2. 家庭

では、その「家庭」とはいったいどういうものなのでしょう。

「家庭」は、社会の基礎といわれますが、その「家庭」の基礎は「結婚」にあります。女と男が「結婚」によって結ばれるところに家庭が作られ、子どもが与えられるようになって、次の世代を育てていくようになります。こうした家庭や家族の形成は、普遍的なことであるし、世界中に共通した理解があると思われるかも知れません。けれども、家族の姿というものも、それぞれの時代・文化・宗教によって異なっています。今は一夫一婦制が一般的ではあっても、一夫多妻で、たくさんの子どもの持つ大家族を築くことが幸福であると理解する地域・文

化もあります。その多様性に対して、聖書はどんな家族像を示しているのでしょうか。

## ●聖書における家庭と結婚

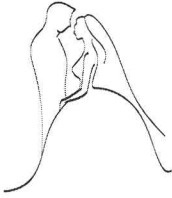
聖書は、例えば一夫一婦制だけが唯一の結婚の形態として描いてはいません。旧約聖書を見るならば、族長時代のアブラハムやイサク、ヤコブは二人以上の女性を妻としていたことが分かります。しかし、新約聖書の時代には、すでに一夫一婦制が基本になっていると言って良いでしょう。それは夫婦や家族の姿というのは時代や社会とともに変わる多様性があることを聖書は認めつつ、その中で何が現実的であり、また大切にすべきことなのかを教えるものだということです。

また、聖書は罪ある人間の姿を描いているのであって、理想的姿が描かれているわけではないことに注意しなければなりません。その意味で、マタイ19章3節から12節に示されているイエス様の言葉は非常に重要なことを教えています。

マタイ19:5-6

まず、第一に、「結婚」はそれぞれ男と女が、自分の生まれ育った家から独立し、新しい家庭を作るために一体となるように、神様が二人の者を合わせられたということを示しています。つまり、結婚は、私たちが自分たちの愛する思いや理想によってだけで結びつくのではなく、その関係に生きるように、神様が呼び出されているということを教えています。

確かに、結婚というのは私たち人間の排他的な愛の行為であって、人を選びとっていくものですし、また、長い生活を共に生きていくための計算も働かさないわけにはいきません。そして、そうした結婚に結びつく愛は、相手を選



ばず、誰にも仕え、報酬を求めないキリストの愛とはある意味でまったく反対のものだとさえ言える側面があります。その極めて人間的な愛が認められているし、神様によって用いられて「結婚」への祝福につながっていると行って良いでしょう。

しかし、実際、個人の気持ちで「結婚」や「家庭」が成り立つのであれば、これほどおぼつかないものはありません。単純に自分の愛情が冷めてしまえば、あるいは様々な条件や理由を挙げて、その関係を自分たちの思いで解消するということになりかねません。逆に、この「結婚」の絆を単純に経済的な制約や社会的な規範に求めることで済ませるわけにもいきません。愛がなく、ただ形だけで「結婚」の生活は成り立ちえないことは当然なのです。

この極めて人間的な愛と絆に、しかし、神様からの祝福が与えられているのは、その人間的愛がさらに育てられ、強められ、神様によって愛されたものであることを証しするものとされていくことを約束しているのです。

二人の男女が愛し合って、結婚し、夫婦になる。しかし、それだけで、家庭が築かれるのではないのです。むしろ、神様がこの家庭に、夫婦となるようにその一人ひとりを呼び出されたからこそ、そこで二人の者は夫婦になっていくのだし、また、家族として生かされていくのだといえるでしょう。ルターは、十戒の講解の中で、親も子もそれぞれの身分を神様から与えられ、そこで求められていることがあることを語っています。その場所とその関係の中に神様によって生かされていく恵みを絶えず新たに受け取り、応えていくことが求められているので

ルター『大教理問答』  
第4戒の解説。

す。

つまり、私たちは自分の感情や理想や計画によって家庭を築くばかりではなく、そこに同時に神様の求めがあることを絶えず新たに見ていくことを忘れてはならないでしょう。

## ●現実への対応

マタイ19:8

では、なぜ「離縁」を認めるモーセの律法の規定があるのか。ここが、イエス様のみことばの大切なところ。イエス様は「人間の心がかたくななために、そういう律法が立てられた」と言われています。罪ある人間は、理想的なもの、あるいは神様の意図された姿を実現できません。それは決して正しいことではありませんが、そうした私たちの現実への実際の対応が許されているし、神様はそのことに心を配ってくださいます。

今日、日本では離婚率が非常に高くなってきているようです。現実には流されて、結婚も離婚も本人たちの自由であるというような理解は決してキリスト教的ではありません。しかし、また、結婚という、きわめて実際的で毎日の生活に結びついた問題を教条主義的に考えることは、何の問題の解決にもなりません。

だからこそ、この人間の現実に対応しつつ、それぞれの「結婚」あるいは「家庭」を捕らえなおしていくべきだといえます。「家庭」は決して聖域ではありません。そこは、確かに簡単には他人が踏み込むことのできない個人的な領域といえるのですが、しかし、それだけにもっとも深い人間の罪が現されてくる場所でもあります。夫婦の問題、家庭の問題に目をつぶるのではなくて、現実に対応する視点が必要とされていることを忘れてはならないのです。

## ●結婚をしない生き方

イエス様のみことばはさらに続き、そこには結婚という生き方以外の生活の仕方をも示していることは、また非常に大切です。

今日では、実際に非婚の生き方をする人たちが増えてきたこともあり、またそれぞれの生き方を尊重・擁護する考え方がひろまっていますから、「そろそろ適齢期」とか、「早く落ち着くほうがよい」というような言い方はあまりされなくなりました。けれども、「結婚して一人前」という考え方は、昔も今も根強いものがあります。そうした見方は、「結婚をしたくてもできない人」も「結婚をしない生き方を選んでいる人」も、どちらもその存在を認めず、差別し、その人々を傷つけるものでしかありません。



イエス様は、一人ひとりに神様が認め、定められたあり方があるのだと言われています。それぞれの形で、この世の生活を生きていくことを許され、または求められていることを、私たちは神様との関係の中で受け取っていくのであって、他人が決めるわけにはいかないのです。逆に、自分自身のその時の思いや判断によっても神様の定めておられることを勝手に決めてしまうこともできません。神様が何を自分に定めておられるところなのかは、生涯を通してたずねていかなければならないことだと言って良いでしょう。

結婚については、実際は、本人の限られた出会いや経験からくる判断や価値観によってだけで自分の人生を受け止めてしまっている場合もあります。ですから、結婚や家庭を作るということは、その本人任せにしておけばよいのだというわけにいかない側面もあります。おおよ

そ、自分たちが持っている結婚についての考えや理解は自分が生まれ育った家庭のあり方に多かれ少なかれ影響されているものです。自分たちのあり方を考え、捕らえ直していくために、教会で、一般的な形で結婚の問題について話し合ったり、学んだりすることも大事なことです。また、具体的な結婚を考える相手がいる場合でも、またそうでない場合でも、個人的な相談やカウンセリングの場を持っていることも効果的だと思われます。

いずれにしても、自分の思い描いている理想の結婚だけが人生であるというような考えに縛られるのではなく、むしろ、それぞれが、お互いの違ったあり方を認め合うことが大事でしょう。また結婚をする者もしない者も、それぞれのあり方で、この世と神様に仕える道が用意されていることを忘れずにいたいものです。

## ●子どもを育てることへ

少子化の時代といわれて、日本の将来に不安を覚えつつも、高い教育費、子どもの安全が保障されない地域社会、競争原理、就職の不安、フリーターやニート、若者の自殺の急増など、子どもを育てることをためらわせる不安も広がっています。

今の日本社会の中で子どもを持つことを恐れ、あるいは、子どもを持つことに責任を負うことが出来ないと考え、不安と重荷を感じる生活よりも、子どもを持たないことを選択するカップルが増えているようです。

確かに、私たち自身が将来に不安を持ち、これからの世の中の状況を厳しいものと感じないではいられないわけですから、慎重に物事を見ているということもできるかもしれません。

しかし、私たちの責任は自分の子どもを厳しい状況に置かないために子どもを持たないことではなくて、子どもに少しでも希望を託せるようにこの世での働きを全うし、よりよい未来に向かう世界を次の世代に引き継いでいくということではないでしょうか。

また、自分がそうであったように、子どもの生もその将来の世界も、究極的には神様のみ手に委ねる信仰において私たちは生かされるものなのです。恐れるのではなく、希望に向かう信仰が与えられているのですから、恐れるばかりではなく、家族を形成していくことに伴う一つひとつのことに誠実に向かい合えば良いのではないのでしょうか。

## ●家庭を巡る私たちの 課題

私たち日本のキリスト者が、キリスト者として生きていくときの大きな問題は、家庭生活の中における信仰の問題だといえるでしょう。

男女比はおおよそ1対2

まず、結婚する相手が、同じ信仰を持つ者であるかどうか、そこから実際の課題は始まっています。教会の中の男女の占める割合から単純に考えても、結婚する人がすべて、同じ信仰を持っている相手を選べるという事情にはありません。そして、実際もそうではないケースが圧倒的に多いのです。

信仰の問題は、その人の生き方、人生のあり方に深く関わっています。ですから、同じ信仰に立つ結婚生活はもっとも望ましいといえるでしょう。そして、たとえ信仰を同じにすることができなくても、そのことへの理解をどうお互いに持っているかということは、結婚のためには是非とも話しておかなければならないことだと思います。

もちろん、信仰において一致がなければ、結婚ができないというわけではありません。むしろ、私たちはそうした結婚を通して、神様の働きに生かされていくということを考えるべきなのです。自分が思い描き、こうあるべきだと考える信仰生活だけが神様に仕えるすべてではありません。

ある人は、結婚した相手が違う信仰を持っていたために、長く教会からはなれて生活しなければなりません。しかし、そういう生活の中でも、折々に聖書に学ぶ機会を得たり、実家に戻ると教会の礼拝に出席したりしながら、信仰生活を守り、長い年月を経てから、家族をクリスマスに教会へと導いた方もいます。どんなに反対されても、家族の中で自分ひとり教会に通い、その教会の様子を家族に伝えることで、家族を自然と教会の中に導き入れた人もおられます。

すでに結婚し、家族を与えられている方が、キリストと出会い、信仰に導かれるという場合も多いものです。そうであれば、なおさら家族の中で信仰を持つのは自分ひとりであるということになるでしょう。キリスト者ではない家族とともに生きることは、日本の中ではごく当たり前に見られる姿です。だからこそ、それぞれに家族を愛し、守り、そこに生かされていく生活の中でキリストを証しする者でありたいものです。いや、そうであるように、神様が私たちを絶えず新たに捕らえ導いてくださるお方であることを知っています。

### 3. コミュニティー

私たちが生きる場は、具体的にはそれぞれの地域の中での生活ということが基本になるでし



よう。仕事場はその地域の中にはない場合でも、職場からそう遠くはない地域に家族を中心にした生活の基盤を持つわけです。生活をするための教育、医療、福祉はもちろん、その地域の街づくりは地域住民が責任を持って担っていくものとなっている。その地域共同体、コミュニティの中でキリスト者がどのようにその信仰を生きるのでしょうか。

ルカ10:1-12 例えば、イエス様はその宣教を町や村を単位に行われています。また、癒された人に対しては、祭司にその身体を見せて地域で生活することができるよう彼らをその生活の場に送り返しています。そして、実際に主の救いに与った人たちが、喜びを持って生きる信仰生活は、具体的に地域コミュニティをその場としてい

ルカ17:14 ることが聖書に描かれています。

だから、私たちも具体的に生活するその地域の共同体の中で、どのように私たちの信仰が働くのか、また証しされるのか考えていかなくはなりません。

## ●地域社会と教会

中世のヨーロッパでは教会は地域共同体の中心にあって、その地域に生きる人々がすべて同じ教会に属していました。ですから、今でもそれぞれの教会は町の中心にあります。長い伝統もあって、自分たちの信仰と地域の共同体の問題は比較的に見える形で結びつきやすいといえるのです。しかし、日本の教会は全く違う教会形成の歴史を持っています。神道や仏教を軸に営まれる伝統的な日本の地域共同体の中では、キリスト教会がその地域共同体との結びつきを直接的に持つという例はあまりありません。むしろキリスト教会は、そうした日本の地域社会か

らはみ出すように存在するといったほうが適切でしょう。

ですから、実は教会も、そしてキリスト者も日本の地域共同体の中にその位置づけをどのように持っているかというのはなかなか難しい問題です。

けれども、多くの教会では、信仰を伝えると共に、幼稚園や保育園をもって地域に奉仕してきた歴史を持っています。その地域の教育・福祉という分野に一定の貢献をすることによって、地域との開かれた関係を結んでいるのです。

また、かつては教会学校が盛んで地域の子どもたちが集まり、子どもたちに学校の教育では得られない交わりと生き方を伝えてきました。近隣の人々もそういう教会に子どもを安心して預け、道徳教育、情操教育などを期待していたともいえます。つまり、子どもたちを通して教会はその地域と結びついてきたのです。

残念ながら、テレビや塾やスポーツクラブなどが盛んになったことで日曜日の朝に子どもたちが集まりにくくなったことや少子化の影響もあり、そして教会のほうでも教会学校の教師がなかなか得られないということも起こってきて、多くの教会で教会学校の働きがかつてのように盛んではなくなってきました。それと同時に、教会はその地域との結びつきが希薄になってきているかもしれません。教会員の集まる場所ということで、会員が地域にいるところはまだ良いとしても、都会の教会などでは会員もそのほとんどが遠いところから電車で通ってくるという場合、地域との結びつきはほとんど課題とならないままということもあります。

私たちはその時代、その地域に教会が置かれている意味を、宣教と奉仕という側面から見直してみることが必要なのではないのでしょうか。幼稚園や保育園を通して結びついてきた地域との関わりも、時代の状況にあわせて、違う関わりを考えても良いのかもしれない。

## ●地域の中で生きる キリスト者

日本の地域共同体というものに目を向けてみれば、これも大きな変化を遂げています。かつて日本では農業を中心とした村共同体が国の大部分を占めていたのです。そこでは農業を営む上での共同が必要でしたし、また、氏神様や鎮守の神様を中心とした祭りという宗教行事を伴って、一年の生活全体がその地域に根ざした形で整えられたものでした。

しかし、近代になって産業構造がすっかり変わり、地域共同体ばかりではなく、いまや家共同体も家族そのものもばらばらになってきています。都会型、消費型の新しい生活様式は、古い絆を壊し、個人化した社会を生み出したのです。

こうした機能的、合理的な社会は、しかし、一人ひとりをも無名化し、人間らしい交わりを失わせ、生活を支える基盤をなくしてしまったのかもしれない。かつての地域共同体からすっかり様変わりをしてしまった社会には、気がつかない間に、いろいろな問題が迫ってきているのです。独居老人の様子を見るご近所がなくなっていたり、あるいはすぐ近くにいる不審者に気がつかないで、犯罪が身近に起きてしまったりしています。

今日、安心できる自分たちの生活を作り出していくには、単純に誰かに任せていけば良いと

いうわけにいきません。その地域の住民自らが意識的に動いていかななくてはならないのだというところに多くの人々は目を向け始めています。

こうした新しいコミュニティ作りが課題となっている中で、地域に生きるキリスト者はさまざまに貢献できるのではないのでしょうか。古い共同体の、神社の祭りを中心とした結びつきには信仰的に入りづらいものがあつたとしても、今日の課題には地域の人々と共に向き合っていかななくてはならないし、またそれができると思うのです。

キリスト者は新しいコミュニティ作りの中に、自分たちの奉仕と証しの機会を与えられているといえるでしょう。自分の生活する地域の中でさまざまなボランティア活動ができます。あるいは、ご近所との関わりの中でも、神様が与えてくださった人格的な交わりと愛の関係を土台として、それを示していくことができるでしょう。教会と家庭、そして職場という場所だけではなく、私たちの生活の場としての地域社会をもう一度捕らえなおしていきたいものです。

## ●地域を越えた交わり の中で



現代社会は、今までにはなかった交通・通信システムによって、世界中に全く新しい人々の結びつきを実現しています。先に触れたように、教会から遠く離れたところから日曜日の朝の礼拝のためだけに教会へと集まってくるなど当たり前で、たとえ外国に居住していても、インターネットを通じてその日のうちに礼拝説教のメッセージを受け取ることができ、また教会の様子も知ることができるのです。そうした現状の中で、教会の交わりのあり方を考えていか

なくてはなりません。

多くの教会では教会のホームページ（ウェブ  
サイト）を作成し、教会の礼拝や活動を紹介す  
るようになってきています。人から紹介をされ  
ることを別にすれば、これまでは教会の存在を  
知る機会、ごく限られた範囲のものでした。  
電話帳で調べるような手間をかけたとしても、  
その教会の様子まで知ることはできなかったの  
です。しかし、このホームページは世界中から  
好きな時間に自分の必要に応じてその教会を知  
ることを可能としました。

つまり、教会がその地域に存在しているとい  
うことに加えて、物理的な限界をこえた人々の  
出会いと結びつきを可能にしています。これ  
は、宣教という意味でも、今までとはまったく  
新しい世界を切り開いたといえるのです。どれ  
だけの情報をこのホームページから発信し、ど  
のようにみことばの種をまき、人々に主との出  
会いへの入り口を作っていくことができるか  
は、今の大きな課題ということなのです。

また、eメールという通信方法も、いまや携  
帯電話とともに、あっという間に普及していま  
す。同時性をもって個人個人がやり取りをし、  
しかも直接的に語り合えるという機能を持って  
います。人々をつないでいく新しい手段なので  
す。

もちろん、このウェブ上の交わりは、匿名性  
が強く、相手が見えないという不安定な要素を  
抱え込んでいます。それだけに、容易に人を傷  
つけるかもしれない危険性が潜んでいます。こ  
の道具を使っていく技術や、倫理的な問題にし  
っかりと目を向けておかなければなりません。  
また、この道具だけでは、聖書的な人格的出会

いを保障することはできません。イエス様が一人ひとりに向かい合い、その人に語りかけ、癒される具体的な愛を届けることには程遠いと言わざるを得ないのです。しかし、その限界を知りつつも、この新しい通信の手段は個人化した社会の中に孤立している人々の心をつなぐものとしてすでに機能していることにも積極的に目を向けていく必要があります、宣教や牧会に新しい何かを生み出していく可能性を持っていると思われれます。

こうした新しいコミュニケーションの手段は単に教会と人々を結びつけるというだけではなく、キリスト者一人ひとりが世界中の人々や活動と出会い、結び合っていく可能性を持ったものでもあります。それだけに、今までのように教会という固定した場所を基盤とするだけではない、新しい信仰の運動として動き出していくに違いありません。

### 〈話し合いのために〉

- ①どのような時にあなたは自分の職業や生活を神様からのコール（召し）と感じますか。
- ②私達がキリスト者として地域社会で生活する時、心がけるべき事柄はなんでしょう。

## 第2章 教会と祈りの生活

### 1. キリスト者を召し、生かし、送り出す教会

エフェソ4:12-16



私たちキリスト者の生活の中心は教会にあります。教会はキリストの体であり、また私たちは自身はキリストに結ばれて主のものとされています。

だからこそ、私たちは教会に連なる者として自分たちの生活を考えることが大切ですし、たとえ教会を離れていたとしても、そこに見えないつながりがあることを知っていただきたいのです。それは恵みと愛によるつながりなのです。

#### ●礼拝から礼拝へ

私たちの信仰生活は礼拝によって始まります。一週間の初めにそれぞれの生活の場から聖霊によって呼び集められ、神様のみことばに養われる礼拝に与る者とされます。みことばと聖礼典によって、私たちは神様の恵みにとらえられ、キリストの愛に生かされています。そして、この礼拝から私たちはそれぞれの日常へとまた押し出されていきます。礼拝の最後は「派遣の部」といわれますが、キリストがその弟子たちを派遣されたように、私たちは礼拝からそれぞれの生きる場所へと派遣されていくのです。派遣された私たちはそれぞれに神様から託された働きをなし、キリストの愛と恵みに生かされ、主を証し、隣人に仕えます。そして、一週間の生活を終えて、再び聖霊の導きの中に礼拝へと集められるのです。

ですから、私たちの信仰生活は、礼拝から礼拝へという一週間のリズムの中に整えられるのだといえます。

#### ●主の前に立つということ

聖書には、イエス様に派遣された弟子たちが

ルカ10:17ほか

マルコ9:28

主の前に再び帰ってくると、自分たちがどのように主の働きに生かされてきたか、報告している場面が描かれています。喜んで報告する場合もありますが、自分たちの働きが十分な効果を見せなかったことを率直に主に尋ねる場合もあります。

私たちはみことばによって養われる喜びがあるから礼拝に集うのです。それは神様との、それこそ人格的な交わりを通しての出来事です。だから、何よりも礼拝は私に語られる神様のみことばを聞くものです。そうであれば、私たちも神様にお話しすることが沢山あるのではないのでしょうか。自分たちのありのままの生活を神様の前に差し出しながら、喜びや感謝、思い悩み、うれしいこと、悲しいこと、神様への問い、賛美、ある時には不平・不満も含めて何でもお話しする。その私たちに対し、神様は適切なみことばをお語りくださいます。

礼拝に集う私たちは、その礼拝への準備、備えとして、この一週間どのような自分たちであったか、神様にお話しする時間を持ちたいと思うのです。それが祈りとなるのです。家から教会へ来る道すがらでもいいし、教会の門をくぐり、礼拝堂の自分の席について主の前に進み出ていくそのときでもよいのです。そして、礼拝の中ではとりわけ罪の告白において、私たちは自分自身が一週間どのようなものであったか、また今あるのか、神様の前にありのまま立つのだということを思いたいのです。式文の言葉をただ読むということではなく、私たち自身を振り返りつつ、主に祈る心でいることが相応しいでしょう。神様に近づくというのは、そうした私たち自身を神様の前に差し出していくことで



す。自らを省みることも、身近な人のことを思い起こすことも、そして、新聞で知らされるようなさまざまな社会の問題について思うことも、率直に神様に祈りましょう。それが礼拝における「今、ここで」私が神様と対面していくことの意味を深めるのです。

礼拝は公同のものとして、そこに集うすべての人、またこの世に対して神様の恵みが示され、みこころが語りだされる場です。しかし、そこは私と神様との人格的な交わりが与えられる場ですから、一人ひとりが自分の生活を携え、主の前に進み出ると、そこで私たち自身に主が語りだしてくださいます。そうした祈りの具体的な主との交わりを礼拝において経験していきましょう。

## ●主の礼拝

礼拝は、主が私たちに仕えてくださるものであり、主の奉仕の業です。みことばによって、私たちにキリストご自身がその愛を示し、また私たちを慰め、生かしてくださいます。

この礼拝は、私のために主が用意され、招いてくださったものにほかなりません。たしかに、私が行かなくても、毎週の礼拝は行われます。しかし、私のために、主がその祝宴の席を用意してくださり、私を招いてくださっていると聖書は語っています。招きに相応しくない自分を神様が最高の祝宴に招いてくださっているのですから、私たちはその招きに応える者でありたいのです。

マタイ 22:1-14

中世の教会では、聖職者である祭司が、信徒一人ひとりのために執り成しをする者であり、信徒は執り成される者と考えられました。礼拝は神様に対するよき業、功績と考えられたミサ

の犠牲を捧げることが中心と理解され、祭司が人々と神様の間に立ち、その功績によって執り成しをしました。信徒はミサを祭司に依頼し、依頼を受けた祭司がその人のための祭壇で執り成しをし、ミサを捧げたのです。ですから、実際にそこに信徒が会衆としていなくても、必要なミサを祭司が執り行うことで礼拝は成立したといっても良いこととなります。

しかし、ルターはこの礼拝についての理解を180度転換しました。礼拝は、神様がそこに集う私たちにみことばをもって仕えてくださるものであって、そのみことばを聞く会衆のない礼拝は考えられません。また私たちは神様と私たちの間に立つ特別な身分としての祭司を必要としません。むしろ、信仰において私たちはみな共に直接にキリストの働きに与り、キリストの執り成しにおいてのみ赦しを得、救いに与るのです。そして、私たち一人ひとりがみな互いに隣人の益となるように働き、仕え、執り成す者とされています。

もちろん、礼拝を整え、キリストを示し、福音を語る者として牧師の働きは必要です。牧師は会衆から委託され、主のみことばを取り次ぎます。それは私たち人間が主の恵みに与るためには具体的に人を通して主が働かれるということの意味しています。その意味で、牧師もまた人を通して執り成しを受けなければならない存在です。

私たちに必要なただひとつのキリストの執り成しこそ私たちの集う礼拝であります。しかし、私たちは洗礼によって皆このキリストに結ばれ、小さなキリストとして、この世で互いに仕える者、愛し、執り成しをする者とされてい

ます。これがルターによる全信徒祭司の考えなのです。

私たちが主の礼拝に生かされていくということは、主によって執り成しを受けた私たちが、その主の執り成しと奉仕を生きることへと養われ、派遣されていくことを意味しています。

## ●礼拝の中の祈り

礼拝は、全体が祈りと言っても良く、それぞれの部において、神様の恵みをいただきながら、告白、感謝、賛美、さらに、求めや執り成しといった要素が織り成されています。

具体的な祈りとしては、今のルーテル教会の式文では、みことばの部のはじめにその日の「特別の祈り」を祈ります。その日の礼拝の主題に沿った祈りで、聖書日課と密接な関係をもって祈られます。集った者たちがその日のテーマとなっている神様のみ業に心を合わせていくための祈りなのです。もともと教会の伝統では、この祈りはコレクトと呼ばれ、集めるという意味を持っていました。つまり、そこに集う者たちの祈りを集め、公同の礼拝においてその祈りを神様に捧げたのです。ですから、この祈りは私たち一人ひとりが神様と向かい合っていくために私たちを整えるものであり、また、私たち自身のそれぞれの祈りをひとつに収斂<sup>しゅうれん</sup>していくものと言って良いのです。

現在は、礼拝の中の祈りについてはすべて式文のことばが用意されています。形式的だという声もありますが、必要かつ十分な言葉をもって祈るためには式文を用いない場合でも、あらかじめ準備することが適当でしょう。もちろん、すべて決められた成文によって祈られる必要はありません。むしろ、牧師でも信徒でもそ

の時々自分の言葉をもって祈ることで心を込めることができるといえます。ただし、あまり感情的になり、流されることは避けたいものです。

「奉献の祈り」は、主に与えられたものに感謝しつつ、私たち自身を主に捧げていくことが祈られます。献金は、その神様への応答の一部を示すという意味であり、私たち自身の働きを捧げていくものであることに心を合わせて祈られます。そこで、神様ご自身から私たちが仕えるための聖霊を改めて受け取っていくという意味もあります。

また、「教会の祈り」では、次のような祈りが祈られると良いでしょう。

- ①その日のテーマや、教会暦に関連した祈り。
- ②その教会の直面する課題についての祈り。
- ③その教会の中で病気や困難に直面している人のための執り成しの祈り。
- ④その教会が連なる地域教会や全体教会、また関連諸施設の働きのための祈り。
- ⑤社会や国家、世界の人々について、また災害や政治的諸問題に対する執り成しの祈り。
- ⑥その他、世界中の宣教に関わる祈りや特別な問題に関する祈り。

これらの中から4つほどを選んで、感謝と願いを短いことばに込め、祈ります。

「奉献の祈り」が自由祈禱になる場合も、この中からいくつかの要素が祈られることが考えられます。ただし、ひとつの礼拝で祈られる内容が重複しないように気をつけたいものです。いずれにおいても、神様のすべてのみ業を数え上げるかのように祈る必要はありません。すべてをご存知の神様にゆだねて、簡単な言葉をも

って祈ることが良いでしょう。

この「教会の祈り」は、今の式文では派遣の部に置かれています。しかし、ある意味では牧会の祈りという性格を持つので、説教に続いて奉献の部に入る前に祈られることもあります。ただ、派遣の部に置かれていることの意味を積極的に考えるならば、私たち一人ひとりが、この礼拝から感謝と賛美を持って、この祈りを携え、派遣されていくということになります。祝福を受けた私たちが、それぞれの生活の場所で、主ご自身の執り成しの働きに生かされていくのです。私たち自身が足りない者であるにもかかわらず、神様の働きの器とされていく喜びから私たちの生活が始まっていきます。

最後に「主の祈り」について見ておきましょう。イエス様ご自身が教えてくださった最も簡潔な祈りで、私たちに必要なことがすべて祈られているといっても良いでしょう。主の体をいただく聖餐に深く関わって祈られてきた伝統があります。キリストのみ国の喜びに与っていく祈りという意味があるのです。礼拝の中でも祈られますが、いつでも、どこでもこの祈りを祈ることができます。この祈りによって、絶えず神様の恵みが自分を包み、また神様に用いられていく私が整えられます。

## 2. 送り出された信仰者の祈りの生活

礼拝によって送り出された私たちの信仰の生は、今度は神様の祝福を携えて遣わされ、それぞれの場所で執り成しと奉仕を表していくものとなります。その私たちを整え、支えるのが祈りです。

### ●祈りとは

祈ることは、信仰の呼吸のようなものだとも

言われます。それがなければ、信仰の命は生きてはいけません。

だれも呼吸の仕方は習うことがなくても自然と身につけています。ですから、本来この信仰の呼吸とも言える祈りは、私たちが習わなくとも自然になされているということが言えるはずのことかもしれません。自分の自然なあり方で神様と向かい合えば、そこに祈りがあるということです。

しかし、例えば、スポーツをする人はそのスポーツにあった呼吸の仕方を習い覚えますし、楽器を奏でる人や歌を歌う人も、書道をする人も、大勢の前で話をする人も、それぞれに独特の呼吸の仕方を身につけていきます。ですから、私たちはその信仰の成長とともに、それぞれにふさわしい「祈りの仕方」を身につけていくことが、信仰の命と働きをより豊かに支えていくものとなります。祈りそのものが神様の恵みの賜物であり、その恵みを受け取り、生かしていく祈りを生きることが信仰の歩みなのです。

## ●祈りの仕方



祈りは神様との対話です。ですから、特別に形式にこだわる必要はありません。でも、逆に形がないと、私たちにはその内容も不確かなものになってしまうということもあります。だから、神様の祈りの恵みを確かにするためには形を整えることも必要なのです。

形式的なことというならば、次のような点に心がけるとよいと思います。

祈りは「**神様に対する呼びかけ**」によって始められます。簡単に言えば、「神様」あるいは「主よ」という呼びかけでよいでしょう。もちろん、イエス様が「アッパー（お父さん）」と

いう親しい呼びかけで呼んでいるように、その呼びかけに、私たちの信仰と信頼を素直に表せれば、どのような呼びかけでもおかしくありません。丁寧な言い方をすることは当然ですが、過度に美辞麗句を並べ形式的な呼びかけになるよりも、なるべく単純な方が自然でしょう。

祈りには身近なことの**感謝**を祈ります。神様がどのようなお方であると自分が受け止めているか、そのことを素直に述べつつ感謝すれば良いのです。また、その感謝の心から、神様への**賛美**も自然と湧き出てくるに違いありません。

また、自分のありのままを顧みて神様の前に告白することは、神様の恵みを受け取っていく自分を整えるはずで

マタイ6:7  
す。ただし、くどくど祈るなどとも言われていますから、簡潔に自分の祈りを言葉にすればそれで十分です。しかしまた、繰り返し祈る深い求めのことは、主への信頼を表すものとして整えられます。

ヨハネ15:16  
最後は、私たちの「**主イエス・キリストの名**」によって祈りを終えます。その名を通して祈られることで、キリストの執り成しに生きるものであることをはっきりと示すのです。また、その名によって祈るものを神様が聞いてくださるという、主ご自身の約束への信頼を表します。

最後に「**アーメン**」。この意味は「まことに」とか「そのとおり」という意味で、もともとは誰かほかの人が祈っている祈りに対して、自分の心を合わせるように唱えられたものでした。やがて、その祈りの言葉そのものも神様からいただくものとして考えられ、自分の祈りであっ

でも、すべてをその祈りを主のみこころのとおり  
に委ねていくという意味を表しています。

このような形式は、そうでなければならぬ  
というものではありません。繰り返しますが、  
自分の心があるのままに神様に向かっていれば  
それだけで良いのです。私たちに必要なことは  
マタイ6:8 神様がすでにご存知でいてくださるのですか  
ら、安心して祈りましょう。

## ●祈りのとき

I テサロニケ 5:17

私たちは、いつでも祈ることが許されていま  
すし、また、祈るように命じられています。特  
別な場所や準備がなくても、道を歩いていると  
きでも、電車に乗っているときでも、そしてど  
んなに短い時間でも、そのときを捉えて、神様  
に一言でも祈るものでありたいのです。祈るこ  
とに構えを持つと、堅苦しくなって、祈りを難  
しいものにしてしまうかもしれません。たとえ  
ば、新聞を読んで心を痛める災害のニュースが  
目に飛び込んできたときや、通りがかりの街角  
で目にした心温まる出来事にうれしい気持ちが  
起こったときなど、その時々、神様に祈ること  
ができると思います。

しっかりとした言葉にならなくても、そのと  
きの思いを神様にささげるようにして、神様に  
呼びかけるだけでも良いでしょう。そのように  
して、祈りの心を養いたいものです。

また、朝起きたときとか、食前、就寝前など  
時を決めて祈るということも大切です。何も決  
まっていないと、忙しい生活の中で、神様に祈  
ることは意識しなければあいまいに流されてし  
まいやすいのも事実だからです。

自分の中に祈る言葉が見つからないときもあ  
るかもしれません。何を祈っていいのか分から

ないというときもあるし、神様に向かい合う信仰そのものが分からなくなることもあります。そんな時には、どうしたら良いでしょうか。

ルターは、祈れないでいるときには、まず詩篇を読んで、自分の信仰を整えたといいます。詩篇には、私たち人間のもつ嘆きや神様への問いかけから、神様の働きに感謝し賛美する信仰までさまざまな詩篇作者の祈りが歌われています。そうした、いわば信仰の先達の祈りは、私たちが祈ることができないでいるときにも、私たちの心に寄り添うものとなるのです。詩篇ではなくても、聖書の言葉を読むことは自分に神様の言葉をいただくこととなります。祈りが神様との対話であることを思えば、私たちの言葉ではなく、神様の言葉を口にすることも祈りとなっているのだと思うのです。また、言葉が見出せないときには、「主の祈り」こそ私たちの信仰を確かにする主の恵みなのだと思っています。

賛美歌や式文の中の歌も私たちの心に信仰と祈りを育てます。教会の歴史の中で多くの人々に愛され、歌われてきた賛美歌は自然な形で私たちの心に響き、私たち自身の祈りとなってくるものです。

祈れないときには、無理に言葉を捜して祈らなくてもいいのです。けれども、そうした自分には聖霊のとりなしが働いていることを知って  
ローマ8:26 いたいと思います。私たちの言葉にならない思いを神様は聖霊の執り成しの働きによって、聞き届けていてくださるので、私たちをそのままにして放っておかれることはありません。

●他者と共に、他者のために

祈りは、「密室の祈り」といわれ、人前で祈

マタイ6:6 るものではないとも言われます。それは自分の信仰が人に見せるためのものではなく、神様にこそ向けられていることが大切だという意味で述べられています。しかし、私たちの祈りは互いに祈り合うところでこそ、その祈りが、真実の祈りとして主の前に聞き届けられるとも言えます。イエス様は「二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいる」と約束されているのです。

マタイ18:20

また共に祈るということの中で、具体的な祈りの言葉を与えられてくることも真実です。そうした交わりには信仰教育的な意味合いも含まれているのです。祈りの言葉も、内容についても、私たちは他者の祈りから多くのことを学ぶことができます。このことは、しかし単に人に習うという意味だけではありません。祈りの言葉そのものが神様からの贈り物ですから、他者の祈りの言葉を通して神様の言葉が語られ、私たちが教えられ、信仰を増し加えられるのは当然のことなのです。

また私たちがキリストとひとつにされる信仰において、何よりもまず祈るべきことは自分のことよりも、他者のための祈りです。執り成しの務めは、いつでも緊急の課題ですから、私たちは臆さずに祈る者でありたいと思います。身近な人のために、また世界の人のために祈ることが私たちキリスト者の大切な務めなのです。

他者のために祈ることを通して、私たちは神様の働きを必要としている多くの人々のことを心におくことができます。そして、こうした祈りを通し、私たち自身がいつでも必要なときに神様の働きの道具とされ、他者に向けた愛を育

てられていくのだと言って良いと思うのです。

## ●家庭の中での祈り



日本では、おそらく信仰の事柄というのは大変個人的なものであって、たとえクリスチャンホームであっても、なかなか自分の信仰について話すことは少ないかもしれません。キリスト教の信仰を持っているのが、家族の中で自分だけという場合はなおさらのことです。自分の信仰を表すことは教会に行くということだけに限られていて、自分の生活の場所ではそれを表わすことが難しいと思われるものです。

しかし、実際には私たちが自分のこと以外で一番心を砕き、そのために生きるのは家族のほずですから、その家族のための祈りをもっと素直に表わすことは当然と言えましょう。そしてそれができたなら、きっと家族の中に信仰の証しとなり、またその継承を具体化する力になると思われます。

例えば、今はそうした家も少なくなってきたいるかもしれませんが、伝統的な日本の家には、仏壇や神棚があって、普段は信仰などと改まることなく、折々にそこで必要な祈りがささげられてきたのです。キリスト教には仏壇はありませんが、自分たちの信仰生活のために、何かシンボルとなるような祈りの場所を用意できると良いかもしれません。たとえば、書棚の一角に聖書と賛美歌が置かれ、十字架が置かれるような工夫があっても良いでしょう。そのそばに、家族の写真やすでに召された親族の写真も置かれて良いのです。そうした場所が家の中につくられることだけでも、家庭の中にひとつの証しが働きます。

今日は、家族がひとつにそろい、食卓を囲む

ことさえ難しくなってきました。核家族化はさらに進んで、家族の中でも生活のリズムはまったく違うのが現実です。すれ違う時間が家族の絆さえ弱め、一番安心できるはずの場所でも心が満たされなくなるということが起こっています。私たちのそうした現実の中で、家族のための祈りが祈られることが大切な意味を持つてくるのです。

## ●祈りの人生として

私たちは一週間の生活のリズムを持っているのと同じように、一年一年を経ながら長い人生の歩みを進めていきます。

誕生、成長、進学、就職、結婚、出産など人生のそれぞれのステージで私たちが節目をもって、そこに神様の恵みをいただく祈りの時を持つことは意味あることです。そして人生の最後も、葬儀・告別式において神様からの祝福をいただいて、み国に召される喜びを表せたならば、遺された者にも大きな慰めになりますし、また人生を生きることの深い意味を神様のまなざしの中に見出していくことができるに違いありません。

信仰生活を、そうした私たちの人生の歩みすべてに見える形で記していくことも、本当に私たち自身が豊かにされることなのです。そして、それが主に捧げていく私たちの生きた聖なる礼拝だといえるのではないのでしょうか。

ローマ12:1

主の礼拝に与った私たちは、祈りの生活に送り出されます。しかし、祈りは決して個人的で、静的な、心の中だけの事柄では終わりません。祈りは私たち主キリストの愛と命、その働きを自らの生活にあらわしていくものとするのです。祈りによって、私たちは世界に関わり、

世界に働く神様の業に参加するのは。私たち自身、この祈りにおいて信仰を養われ、他者に仕えるものとして整えられていきます。

私たちは、自分にどれほどの働きができるものか知らないし、知る必要もありません。神様がすべてにおいて働いてくださることに信頼をして良いのです。しかし、神様ご自身は、私たちを招き、弟子とし、私たちを用いてそれぞれの働きへと遣わされます。それは、私たちの生を本当の意味で豊かにする神様の新しい創造の業に他なりません。その神様が、私たちの信仰と祈りの生活を通して確かに働いていくことを知っていただきたいのです。

〈話し合いのために〉

- ①私たちが礼拝に集うことの意味、そこから遣わされていくことの意味を話し合ってみましょう。
- ②あなたは毎日の生活の中で、どのような祈りの時・場所をもっていますか。

## 第3章 今日の諸問題

今日の私たちは、百年前、いや五十年前には思いもしなかった様々な問題に取り囲まれています。例えば、生命科学の発展の中で直面している問題は、私たちの「いのち」について深い問いを投げかけているのです。また、21世紀をむかえた現代の環境問題は、人類のみならずこの地球の将来に影を落としています。さらに、最近の世界でみられる政治的な対立は、宗教的なテロリズムと結びついて複雑かつ深刻な様相を示しています。

こうした現代の危機的現実に対して、伝統的なキリスト教の考え方の援用では追いつけないのではないかと思われる程です。しかし、一方では現代に至るまでの科学・文明・政治世界は西欧のキリスト教社会が中心的な役割を果たしてきたのも事実です。それだけに、こうした諸問題の原因にはキリスト教思想が関係していると、たびたび指摘・批判されるところです。

もちろん、こうしたことを考える時に、西欧の文化や思想という問題と、キリスト教信仰との区別は必要です。しかし、その上で改めてこれらの問題にキリスト者としてどのように向かい合うのかということが問われているのだと思うのです。

この章では沢山の問題の中から、「いのち」と「環境」、そして「平和」に焦点を絞り、課題を考えていくための手がかりを得ていきたいと思えます。

### 1. 生命倫理

バイオ・テクノロジー、医療技術の発展は、人間の「いのち」に対する考え方に根本的な変

化をもたらしました。とりわけ、脳死と臓器移植の問題、体外受精や代理母の問題、また、クローン生命の問題など、ある意味で私たちが決断を先送りするわけには行かない形で差し迫った問題になっています。

この短い紙面で、こうした生命倫理に関わる問題全般にわたって見ていくことはできません。そこで、キリスト教信仰という立場から考えておかなければならないポイントをできる限り簡潔に示すことにしたいと思います。

## ●聖書の「いのち」の とらえ方

キリスト教の「いのち」についての理解は、端的に言えば神様のみ手にある「いのち」という考え方です。人間が勝手にこれに手を出してはならないというのが聖書的な考えといえるでしょう。ですから、そもそも私たちが「いのち」に関わる技術を持っていることが、大変恐れ多いことなのだと言わなければなりません。また、私たち一人ひとりも、この「いのち」はまず神様の与えられたものなのであって、あなたも自分のものであるかのように勝手にしてはならないということでもあります。

ルカ6:9  
しかし、聖書は「いのち」に対してまったく手をつけてはならないと教えているのでしょうか。そうではありません。イエス様は、例えば安息日の規定に関わって話されながら、癒すこと、生かすことの大切さも示されています。人間の「いのち」を助けるための行為は否定されていないのです。いえ、むしろそのことを積極的に第一義のこととするように言われています。究極的には神のみ手のうちに「いのち」を見ることが必要なのですが、しかし、その「いのち」を必要に応じて助けるための責任を分け

与えられていると言って良いでしょう。

神様による人間の創造という視点から、「いのち」の理解に関する重要な考えを見てみましょう。創世記1章26節にはこう言われています。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」つまり、人間は「神の像」として造られているということです。このとき、神様はご自身を「我々」と複数形で呼んでいます。これにはいろいろな意味がありますが、人間は交わりの存在としての「神の像」に似せて造られていることが示されていると言って良いでしょう。また、同じ27節を見るならば、神様は人を男と女とに造られています。このことも、人間が交わりの存在であり、その関係性の中に「いのち」を与えられているということが理解されます。

人間は土のちりで形作られ、神の息吹を吹き入れられて生きる者となりました。つまり、自然的、物質的な要素と、霊的なあるいは精神的なものの双方によって人間は人間として生きているのです。

近代哲学者デカルトの  
心身二元論との対比

しかし、創造された肉を単なる物体、あるいは精神に対する客体とすることはできません。たしかに、パウロは霊の法則と肉の法則という言葉方をしながら、肉の法則に従う罪の問題を語っています。しかし、パウロは神様との関係にあることを霊とし、そうではない場合に肉のなものだといっているのです。それをあたかもギリシャ的な霊肉二元論と等しく読むことはできません。

ローマ7:13-8:17

心も体も合わせたその人間全体の、その「いのち」が、まず神様との交わり、そして人間同

士の交わりの中にあることを聖書は見ています。つまり、この関係性の中にこそ「いのち」の問題を見ているのです。

## ●だれが決めるか という問題

脳死と臓器移植の考えは、人の命を助ける行為として説明され得ます。だから、愛と癒しを教えるキリスト教は、そうした臓器移植を進めるものだと言われるかも知れません。それはある意味で、大変分かりやすい説明の仕方です。脳死が死と判断できるかどうかは、生命科学の問題であって、医学の問題なのです。それ自体に問題がないとした場合、それに伴う臓器移植によって人の命が助かるならば、そういうシステムができればよい。一般的な意味で、すでに死を迎えている人間の体が用いられて、他の人の「いのち」を助けることができるならば、そのことに何の問題もないと思われることでしょう。

しかし、実際にはひとつの「いのち」が終わり、他の「いのち」を助ける働きがそれに続く時には、「いのち」についての重要な判断がなされていることを知らなければならないのではないのでしょうか。一体誰が、このひとつの「いのち」の終わりを判断し、その体を持って、他者の「いのち」を救うことを決め得るのでしょうか。他者の「いのち」に関わった判断には、人間の利己的な思いが働きかねません。医者も患者もそうした心の働きから自由ではありません。

こうした場合に、本人が「自分がどういう状態になったら、この移植をするように」と意思表示することが大事な判断材料になるのは当然です。そして、この議論をするときに、必ずな

されるのは「いのちの質」、つまり「クオリティー・オブ・ライフ」(QOL)の考え方です。そこでは、いたずらな延命をさけること、そして個人個人のその生の営みの尊厳が守られることが考えられます。

しかし、大事なことを忘れてはなりません。人間の「いのち」の質は、個人の考えの中には見出されないはずで、聖書は、むしろ関わりの中に、もっと言えば愛する関係の中にこそ、その「いのち」の質が見られるのであることを示しています。何かが出来ること、自分の生きがいを持って生活できるかどうかということ、「いのち」の質をはかることはできません。何もできないように見えても、その「いのち」が神様の手によって、関係の中に与えられているとき、そのこと自体に意味も価値も見出されるべきなのであって、たとえ本人であろうとも誰かが自分勝手に決めることはできないのです。死んでいるという医学的な脳死判断も、実際の関わりの中での「いのち」の理解には、役に立たなくなるものでもあることを、柳田邦男氏はいわゆる「二人称の死」の難しさとして著しています。

ですから、「いのち」の質を誰かが決めようとするところに、人間の傲慢さと深い罪の問題とがあるのではないのでしょうか。

## ●罪の行為と愛の行為

こうした人間の限界や罪深さを深く知らされるのが、実際の医療の現場であるかも知れません。

にもかかわらず、もしもこの判断をするのだとしたら、やはり神様から「いのち」を預った本人、またその保護者ならば、特定の条件の下

柳田邦男『犠牲（サクリファイス）：わが息子・脳死11日』文芸春秋社、1995年

でそれをなしえるのでしょうか。他の誰かではなく、あくまで本人の意思の中で「脳死状態の場合の臓器提供」ということを可能とすることがありえると思われます。誰にも責任を負わせない機械的な処理によって、この判断をあいまいにしたり責任逃れをしたりしてはならないでしょう。

臓器移植は、一人の臓器を取って、他の「いのち」を生かすということではありません。あくまでも、その人本人が他者に「いのち」を差し出す愛の行為として、見出されてくるべきものなのではないでしょうか。具体的なシステムを考えていくときに、実はこのことはきわめて重要な意味を持ってきます。

ヨハネ15:13

ただ、どんなシステムでもそれができれば、他者の命の終わりを待ち望む人間の罪深さも働きます。お金も動くでしょう。現実には奇麗事では済みません。だから、本当にこうした事柄が進むところには危険性があります。それでもなお、ひとつの「いのち」を救う働きを可能とするものは何でしょうか。そこに神様の赦しと恵みの働きを見出すために、私たちは深く考えていかなければならないと思います。

## 2. 環境の問題

あふれかえる人口、その生活に必要なエネルギーと経済産業は地球のあらゆるところに「自然破壊」と呼ばれる深刻な問題を引き起こしています。地球の温暖化により、かつてない早魃<sup>かんばつ</sup>や洪水、大型の台風やハリケーン、大雪や冷害などの異常気象が発生し、直接間接に人々の「いのち」を脅かしているのです。それは、ほんの一例に過ぎません。きわめて現代的な課題であるこうした環境問題にキリスト教信仰は何

を発言するのでしょうか。

## ●聖書からの エコロジー

しばしば聖書の思想は、人間を自然よりも優れたものと位置づけ、自然を自由に利用しようとする考えに立っているという批判が向けられます。そうした主張をする人々が聖書の中から取り上げる箇所は創世記の1章28節の神様の人間に対する祝福の言葉です。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」この「支配せよ」という言葉が、人間を自然に対する支配者としたといわれるのです。



しかし、第1章のはじめにも書きましたようにこの「支配せよ」という語は、もともと「維持し、守るように」という意味をもった言葉です。ですから、人間は自然に対して決して敵対的なものではありません。むしろ、この神様の造られた世界に対しての責任を与えられているのです。

そして、神の創造という信仰は、決して人間中心的世界観を主張しません。ただ神中心の世界を示されてくるのです。世界は神の**被造物**として存在する。だから、造られた世界のいかなるものも神ではない。自然も神ではないし、また、人間も神ではありえません。人間はそこに自由と謙遜を与えられます。しかし、もう一方で世界は**神の被造物**であれば、これは当然に大切に守られるべきなのです。何物も粗末にされてはならないし、破壊や破滅を見過ごしてはなりません。だから、自然とともに生きる思想は、何も森羅万象すべてのものに神の霊を見る多神教の専売特許というわけではないのです。

むしろ、創造信仰のゆえに、キリスト教もまた人間中心ではなく、神中心の理解の中で、自然とともに生きる道筋を見ることが出来ます。

### ●人間の関わりと責任

そして、実際のエコロジーを考えるのであれば、私たち人間の責任を明確にすべきです。アニミズム的自然信仰には、多少の問題が人間にあっても、自然がちゃんと解決する力を持つものとされてしまいかねません。山にごみを捨てておいても、やがてすべてが浄化されるというほど問題は単純ではないのですから、自然の力に任せるわけには行きません。

自然破壊、神様の創造された世界が痛んでいるとするならば、それは人間の罪のゆえであり、被造物全体のうめき、苦しみを表しているのです。

創世記3:17

ですから、究極的には、神様の救いを待ち望みつつも、今の世界への責任を人間はしっかりと自覚し、これに取り組んでいかなければなりません。

ローマ8:18-25

### 3. 宗教と「戦争と平和」

今日の世界の争いや対立の背後に、しばしば、宗教的な対立があるということが指摘されます。本来、人々の救いを教えるはずの宗教が戦争を起こす力となっていることをいったいどう考えたらよいのでしょうか。

もちろん、それぞれの宗教は、そして、とりわけキリスト教は本来、平和を作り出すことを使命としているのだし、またはっきりと殺してはならないと教えています。しかし、同時に聖書には戦争も描かれ、例えば、あのカナンの地にイスラエルの人々が定住する過程には神様の導きとしての戦争の勝利が描かれているので

マタイ5:9

す。そこにはあからさまな民族中心主義があり、それが現代にも影を落とす、深い政治問題になっていないかと問われているのです。

こうした背景に、キリスト教の歴史を重ねてみるならば、キリスト教がどれほど平和を教えているとしても、そこには結局、キリスト教中心の排他的思想があるということにならないでしょうか。

## ●聖書から学ぶ

誤解を恐れずに言うならば、聖書は現在の特定の民族文化と結びついたり、聖戦思想を振り回すような「キリスト教中心思想」とは無関係なのです。

ルカ10:25-37 「よきサマリア人のたとえ」は、宗教的隔てをこえて、神様の働きを誰が担っているのかということを深く考えさせるたとえです。

今日の大問題として、宗教間の争いがあるといわれます。そして、一神教の排他性ということが、しばしばその争いの原因と指摘されています。

創世記1章から11章  
コロサイ1:20

しかし、聖書の神様は世界全体を創造し維持され、そしてその全てを救いへ包みこむお方です。聖書はイスラエルの歴史の前に、世界の創造から始められ、また被造物全体を新しくし、世界を神と和解されることを、神様ご自身の働きの目的として示しているのです。そうであれば、キリスト教信仰は排他的であるということではできません。

## ●諸宗教とともに

マタイ 27:54

実際、イエス様の十字架は、人間の宗教的な枠組みの限界性を、神様のみ業の中に示されたのではなかったでしょうか。当時のユダヤ教は確かに唯一の神信仰を指し示していました。けれども、その信仰こそが本当には神様のみこころを理解できないものであったのです。そして、あの十字架のイエスを神の子であると告白したのは、神さまを信じ、その救いを待ち望んでいたユダヤ人ではなく、異邦人と呼ばれたローマの百人隊長であったというのは象徴的な出来事です。

神様のみこころを理解できない私たちにも関わらず、神様はその私たち一人ひとりを打ち砕き、ご自身の救いの働きにいれられます。つまり、キリスト教中心主義というものも十字架につけられなければならないのです。神様は全世界をお造りになり、それを完成し、救われます。

その世界を救われる働きを神様は教会のみをその道具として働かれるわけではありません。神様はあらゆるところに働き、それぞれの宗教のうちにもその働きをもっておられるのかもしれませんが、すくなくとも、キリスト教はそれを独占していると自己規定することはできないし、むしろ、絶えず神様のみことばによって正されていかなければなりません。唯一の神様は絶対と信じますが、それを信じる私たちは決して絶対の存在ではないのです。

そうであれば、キリスト教を信じつつ、他宗教にも謙虚に耳を傾けながら、いったいどのような働きが神様の御心にかなうか、どうしたら真に人々に仕えるものたりえるのかを尋ね求めていきましょう。

そして、この世界の具体的な平和を願い、祈り求める信仰者は、何よりも神様の求められる愛を生き、平和のために働く責任を持っているといえましょう。私たちが罪深い人間の歴史を繰り返さず、悔い改めを生きるように、平和の主キリストが共にいて私たちを導いてくださっています。

現代の課題は多様で、私たちはその時々、信仰において何をすべきか、どう生きるべきか問われています。私たちは、どんな時にも、ただ主に信頼しつつ、みことばに聞いて信仰の生を歩んでいきましょう。

〈話し合いのために〉

- ①聖書は人間の「いのち」をどのようにとらえていますか。
- ②自然破壊・戦争などの問題に私たちはキリスト者として、どのように行動することが求められているでしょうか。

# 証 言 集

キリスト教信仰をもって  
この世を生きてきた人々の証し



## キリスト者として生きる職業人

京都教会員 谷口輝男

### キリストと者としての学び

教会へ誘われて2年後の1960年12月に受洗、教会学校教師の奉仕を勧められ、中学生を担当しました。子ども達と一緒に聖書を読み、賛美し、お祈りをする積み重ねが、私の聖書知識や信仰面に大いに役立ち、力を受けたように思います。

自宅は教会に近く、聖書研究会、祈禱会、夕礼拝、特別伝道集会等に参加し、学びを深めることができました。

教会で挙式した時、親族、会社の関係者に私がキリスト者であることが知られました。ある時、教会でルーテルアワーのインタビューがあり、私は自分の信仰や心境をお話したことがありました。その後、しばらくして、会社の同僚が、早朝のルーテルアワーで私の話を聞いたと伝えてくれました。会社の人が朝の早いラジオに耳を傾けていることに、私は本当に驚きました。

新興住宅団地に住居が与えられ、女性宣教師によって、バイブル・クラスを始めたところ、家に入りきれなくなり、団地の自治会集会所を借りることができました。転勤で去った後も継続されて、成人洗礼を受けた人が与えられたことを聞き、神に感謝しました。私達の4人の子ども達も堅信礼を受け、それぞれ与えられた道を歩んでいます。

### 職業人として生きる

受洗した頃の仕事は、時間的に余裕があり、集会にも出席して信仰的に充電できました。政府の所得倍増計画により、所得が年々上昇、ローンの活用で土地、住宅や自動車の需要が活発になり、会社の新機種開発、発売、コスト低減等の要請が増して、自動車の販売競争が激化してきました。新製品の開発から量産にかけての仕事は迅速に目標値を達成させるという活動は大変なものでした。毎日6時過ぎに家を出て、資料を整理、7時半から工場長主催の会議で報告し、討論の上、対策項目が決定され、即、対策実施と生産トライを行い、不具合の調査と評価を行

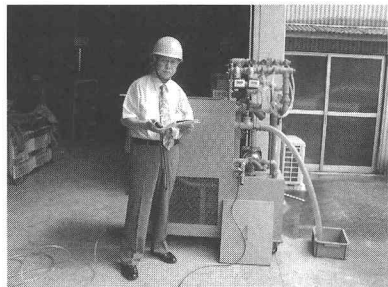
って、報告書にまとめる仕事をその日の内に完了させ帰宅する。当時、流行語の「モーレツ社員」や「企業戦士」と同じ状況で、睡眠時間が4～5時間の繰返しが約2年続きました。会社は事業拡大のため、広大な土地を求めて田舎へと移転、私も共に移住を余儀なくされ、日本経済成長過程での一つの歯車となって技術の向上に努めてきました。人を使うことよりも、未知の物への挑戦と物造りが好きな私は、マネジメントよりプロフェッショナルの道を選択しました。会社から予算をもらい、自分のやりたいことをさせてもらえると言う、技術者冥利を経験しました。成功より失敗を重ねましたが、そこで様々なことを学ぶことができました。私は、どんな物事でも、原因と結果があることを念頭にして、現地へ出向き、現物をあらゆる角度から自分の目で見て「なぜ」～「なぜ」を繰返し、知恵を捻り出し、真の原因を確かめ、掴むという手法が、自分の技術向上に大変役立ったことを思い出します。弁護士の中坊公平さんも「事件現場をどの角度からみるかということが大切で、ありのままに見て本質を見つけるといふ、現場には事件の本質がある。」とされています。

私は行き詰まった時、解決の方法や知恵を与えてくださいと神に祈り求め、神に感謝したことが幾度もあります。会社を定年退職し、これまでに培ってきた技術を、海外と日本国内に提供し、また、技術支援の他に、特許商品の製造販売のお手伝いもさせていただいています。良い働きをする者に不可欠なことは「考え抜くこと、やりぬくこと、やり続けること」を実行することです。失敗するのを恐れて、行動せず、発言せず、現実としては不可能との考えに陥ってしまう人を見かけます。

しかし、弱さに泣き、神の助けを求めると、人の心に思い浮かびもしない解決の道、方法が与えられ、喜びに満たされる経験をしました。

このような厳しい仕事を続けている時でも、平安と癒しを求めて、家族と一緒に日曜日は教会へ行き、礼拝を守り、奉仕をしました。

会社での仕事の進め方、考え方は教会にも活用できると考えています。



## 憎しみが溶けた

大江教会員 谷口恭教

私は障がい者です。3歳のとき、小児麻痺に罹り、左手と右足が現在も不自由です。でも、私のような者でも、神様は用いてくださいました。私の人生で最も感謝すべきことは、私に働きの方を与えてくださったことです。熊本市にある九州学院。ここは私の母校でもありますが、ここから英語教師として招聘されたときは、夢かとばかり驚きました。私にはハンディが多すぎます。それに、英語も実は復讐の道具として考えていたからです。

### 空襲で母が亡くなる

1945年8月、太平洋戦争が終わりました。嬉しくはありませんでした。むしろ、怒りに震えていました。「もっと続けたらいい。今になって戦争を止めるなら、母の死は意味がないではないか」。母は、同年7月の熊本大空襲で命を落としました。防空壕から出て逃げる時、家族は散り散りとなり、母を発見したのは次の日の朝でした。道端に遺体となって転がっている母を見たとき、私は言葉を失いました。焼夷弾の直撃をわき腹に受けて、内臓が破裂していました。戦争というのはむごいもので、特に空爆の後には何も残りません。病院も交番も葬儀社も焼け落ちてしまって、棺すら見つかりません。母は自分で埋めました。14歳、中3の夏でした。私は復讐を誓いました。

### 恩師との出会い

戦後のわが国は飢えに苦しみました。食べる物が無い。いち早く助けてくれたのは、アメリカ国民でした。大量の食料、衣料、医薬品を送ってくれました。ララ物資です。あの援助がなければ、多くの日本人は飢え死にしたでしょう。私も感謝してそれらを口にしながら、復讐の思いを消すことはできませんでした。私はいつの日か米国に渡る。空襲に参加した空軍兵士の住所を調べ上げ、一人ずつ刺殺する。毎日計画を練りました。怨念と憎悪は、時に、人に生きる力を与えます。私は憎むこと

で生きて行きました。ところがここに問題が生じました。英語が話せなければ復讐はできません。私はその頃、宣教師として九州学院に赴任してこられたマッカートニ先生のバイブルクラスに入れてもらって、英語を習うことにしました。驚きました。アメリカ人の中にもこんな誠実な人がいるなんて。私は、米国人は悪鬼の塊とっていました。

## 怨念が溶けた

何でも質問していいという先生に向かって、私はアメリカの横暴をなりました。自分の母親が空襲で死んだなどとは一口も言わず、「なぜ米国は非戦闘員の市民に爆弾を落としたか。なぜ日本に原子爆弾を落としたのか」と。先生は一言も弁解せず、「すまない。でも米国にも戦争に反対していた人たちがいたことだけは知っていてくれ」とおっしゃいました。その悲しそうな顔の中に、私は人間としての誠実さを見ました。この「すまない」という言葉は、戦勝国の人が簡単に言える言葉ではありません。先生はおっしゃって良かったのです。「何を言うか。日本は宣戦布告なしに真珠湾を攻撃したのだぞ。中国では日本軍はどれだけの人民を殺したか」。でも、先生は何もおっしゃらず、ただ「すまない」と言われました。このことは私の胸を打ちました。このクラスに入ったことは良かった。この後は聖書の言葉も素直に心に入ってくるようになり、同時に復讐の怨念も徐々に、春の雪のように溶けて行きました。私が洗礼を受けたとき、先生ご夫妻は大層喜んでくださいました。

## 出会いは恵み

私は不思議に思います。あれほど憎んでいた米国人の話す英語を教える職業としました。マッカートニ先生との出会いがなければ、私はいつまでも怨念から逃れることはできなかつたでしょう。神様は、誰かが困ったらそっと人を派遣して助けてくださいます。出会いは恵みだと思います。式文の中にある「派遣」という文字を見るたびに、私も困っている人の横にそっと寄り添いたいと、いつも思います。それが、溢れるほどの恵みに応える私たちの任務だと、今思っています。



## 職業人のための極意

本郷教会員 増島俊之

私は、行政官として35年間、大学教授として11年間を過ごした。私は1959年3月に受洗し、4月から職業人としての歩みを続けている。他人は苦笑するかもしれないが、ついこの間役所に入ったような思いが心のどこかにある。信仰の歩みについても同じである。職業人としての苦労や辛さのようなものは、行政官の時代の方が顕著だったように思う。それだけに、聖書のありがたみを味わうことも多かった。そのうち、二つだけ語りたい。

### 対話の極意

役所に入って、行った仕事といえば、その内実は人との対話である。それが上司であったり、部下であったり、他の役所の人であったり、与野党の政党や関係団体の人々である。学者が相手の場合もあった。役所の中で、地位が上がれば上がるほど、朝から晩までしている仕事は対話になる。

しかも、できたら話したくないなという相手が、一番重要な対話の相手であることが多い。一番苦手だと思っていることが、一番主要な仕事になっていった。苦手であると思っているから、対話について思いめぐらすことが多かった。そのような私が、比較的根回し上手と言われた。対話は、人と話せばそれで終わるというものではない。対話のゴールは、説得であり、納得である。

私がたどり着いた対話成立の条件は、次のようなものである。

- ① 相手の立場についての基本的な知識を豊かに持っていること。
- ② 広く世の中のことに関心を持つこと。自分の世界以外に関心を持たない人には、対話の素質はない。
- ③ 相手が努力していることに共感を持つこと。
- ④ 自分の中に誇りうるものを持っていること。
- ⑤ そして最後は、対話の極意ともいべきものである。

対話の極意は、相手を尊敬することである。その極意こそ聖書に明示されているのである。

「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。」(フィリピの信徒への手紙2:3—4)

## 権力の墮落

権力は墮落する。日本の内閣総理大臣も、中国の皇帝も、ローマの皇帝も、容易に墮落する。そのような最高権力者のみならず、役所の係長も会社の課長も容易に墮落する。それは他の多くの分野の職業人にも当てはまることである。前を目指していたときの人びとの美しい顔は、富を得、名声を得、権力を得ると、傲慢になり醜くなる。何故だろうか。その理由は、必ずしもよく分からない。唐の皇帝太宗は、自分が墮落することを恐れた。そしていつもビクビクとして過ごし、墮落に陥らない方策を必死に考え続けた。その記録は、歴史家によって「貞観政要」という書物として残され、日本でも千数百年間にわたり、帝王学の教科書となった。ただ、そこに示される方法論も絶対的なものではない。

しかし、聖書は、人間の墮落を防ぐ最高の極意を二つ示している。その一つは、フィリピの信徒への手紙3:12—14にある。聖書は、「既にそれを得た」という考えを排している。目標を目指して、ひたすら求めて歩むことに人間の生き方の極意を示しているのである。

## 偉くなることの意味

もう一つの極意は、この世の人が最大の魅力と考える「偉くなる」、「仕えられるようになる」ことの意味を全く逆転させていることである。

後に12弟子となったヤコブとヨハネも、救いの仕事に専心しながら偉くなることを望んだ。彼らの母親は、もっと切実に子どもたちが、「偉くなる」ことを願った。そこで、イエスに直訴するのである。このことは、私たちが、心の中で、何を望んでいるか、ということ赤裸々に語るものである。これに対して、イエスは、「偉くなる」ことは、「自分を低くする」ことであり、「皆に仕える者になること」である、と宣言する(マタイによる福音書20:25—28)。

この世の価値の逆転である。これは、聖書が職業人に与える極意である。



左側が筆者  
(中曾根元総理と対談)

## ステンドグラス制作を職として

松本教会員 山崎種之

私は未熟なガラス工芸職人です。創造主の前には重い罪人にすぎません。20代で初めて聖書の福音に接し、救いの恩恵に浴することができました。その後、様々な人生の苦難を潜り抜け今日までやってこられたのは、聖言の導きとお祈りに応えていただけたからこそと思っています。

私は大変な出来事に遭遇し、転勤しましたが、その事後処理を済ませて、友人と共にスペインの旅に出ました。旅路の途中の田舎道で雨に遭い、農民の手造りと思える土煉瓦の家に雨宿りさせてもらいました。雨の日の午後、古びた室内のたたずまいは昔の農民たちの祈りの場だったのでしょう。小さな窓のさびた色ガラスから柔かい光が差し込んでいて、傷ついた暗い心が清められる感じがして、おのずと光の向うほうへと祈っていました。

そして、帰国してからステンドグラス技情塾に入門。ドイツでマイスターを得た方から技術を習得し、塾終了後、信州安曇野に「工房アスカ」を開き、キリスト教関係だけにしぼり制作を続けております。主題は常に聖書であり、伝統として受け継がれてきた図形シンボルを中心にしています。それは幼児から老人まで、すぐ理解してもらおうことを念頭においています。抽象表現や自分の主観を極力さけるようにしています。

### 職人としての感謝

水野源三記念坂城栄光教会、三浦綾子記念文学館、星野富弘美術館等にステンドグラスを制作させていただいたことは感謝です。北海道斜里の小さな礼拝堂から、沖縄宮古島の教会保育所にいたるまで、全国230余の教会関係施設にステンドグラス制作の機会を与えられました。一つの制作が終わると、決まって次の制作依頼があります。宣伝らしきものはしておりませんが、族長ヤコブの如く、祝福してくださいと懇願する毎日です。主はこの土の微小の器を活かしてくださいます。与えられた力を最大限にと念願しております。

## 聖言の支え

若い頃、最初に心に刻まれた聖言は、マタイ7:7「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」

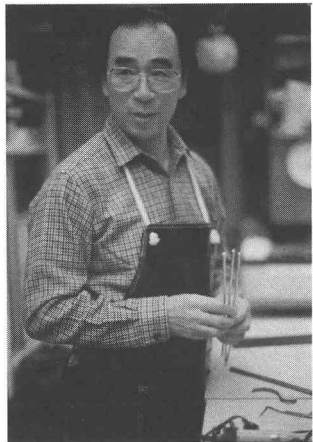
臆病で小心で、その上知恵も経験も乏しく、いつも後から消極的に行動しておりましたから、この聖言の勧めは強く心に刻まれました。エレミヤ1:5「わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた」。イザヤ43:4「わたしの目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛し」。ヨハネ3:16「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。雷鳴と暗雲が晴れ渡っていくように、聖書の福音のメッセージが与えられ、この人生を積極的に素直に生きようと思わされております。

### 愛唱讃美歌は教団讃美歌121番「まぶねのなかに」

大工職人の子として成長された主イエスのご生涯のはじまりから唱われています。社会で実生活の職業は多様です。職業の分野は何であれ、貴賤上下はなく、それぞれ貴いと思います。若い頃牧師から「自分に与えられた才能を活かせる職業を選びなさい。それがどんなに苦しいものであってもパウロの勧めを聞きなさい」と諭されました。

ローマ5:3「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」

主イエスは、近寄り難い高貴なお方としてではなく、鉛と銅とガラス屑にまみれた仕事場の中に共に作業し、共に呼吸していただくのを実感しております。若い人々が早い時期にご自分の職業を選び、聖言に導かれて練達され、希望に満ちた生涯を得られますように。そして共に「この人を見よ」と、主イエスを讃えようではありませんか。



## 「おつきあい」の大切さ

浜名教会員 鈴木勇也

### みかんと肉牛

私は静岡県西端、浜名湖の北側に位置する浜松市三ヶ日町で「みかん」と「肉牛」の生産を生業とする専業農家です。平成の大合併で浜松市となった三ヶ日町ですが、もともと人口1万6千人の小さな町です。「三ヶ日みかん」というのを聞いたり、見たりしたことのある方は結構いるのではと思います。

牛の世話にしろ、みかんの栽培にしろ、基本的に農業は一人でできる仕事ですから、仕事そのものはキリスト者として生活していく上でなんの問題ありません。自然との関わりの中に神の存在を感じながら自分のペースで働けることは、農業ならではの魅力です。

### おつきあい

農業という仕事柄、また三ヶ日という土地柄、住んでいる地域を全く無視して生活することはできません。私は27歳の時、それまでの仕事を辞め、家業を継ぎました。それと同時に、給料取りの時はほとんどなかった地域との「おつきあい」が少しずつ始まりました。まずは自警隊（地域自主防災組織）、消防団、地区分館活動協力員、お祭り当番等々。そして農業関係で、農協青年連盟、農事部、自立経営農業振興会、出荷組合地区支部等々。

これら関わらなければならぬ組織・集まりの数の多さにはまず驚きました。そしてそれぞれの会合（寄り合い）や行事ごとに振る舞われるお酒の量にまた驚き、さらに年配者の酒の強さと声の大きさにはもっと驚きました。重ねてこれらの組織・集まりの物事の多くが酔った中での雑談で決まっていくのを知ったときは、とまどいと強烈な違和感を感じました。カルチャーショックでした。

これらの組織・集まりの行事の中には慰霊祭、祈年祭等の宗教的行事も含まれており、どのように対応すべきか迷いました。深く考えるのが

面倒で、「まだ若いから」と父親につきあいを任せて逃げることで当座をしのいでいましたが……

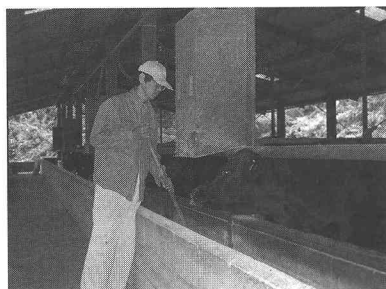
歳とともに「若い」という口実も使えなくなり、田舎の「おつきあい」に次第にどっぷり浸かっていくにつれ、自分の気持ちも変化してきました。それは幅広い年齢層とのつきあいの中、様々な人たちと話をすることで様々な考え方を知り、自分の視野が広がったからだと思います。若い頃のように「自分はキリスト者だから」と構えることはなくなりました。地区の神社やお寺では素直な気持ちで手を合わせることができます。

神学的、教義的にはNGかもしれませんが、個人的には、地域の「おつきあい」は大事にした方が宣教的にいいことだと思うのです。異文化のキリスト教が田舎で受け入れられるためには、地域から浮いた異次元の世界の事になってはだめだと思います。

### 背中キリストを宣べ伝える

私の所属する浜名教会は、この三ヶ日町にあって、東海教区内でも最小の教会です。昨年春には、多くの方のお支えにより念願であった新会堂が与えられました。PM21で示されている宣教方策に沿って、教会組織の再編等が今後進められていくと思いますが、浜名教会の様な田舎の教会に、どれだけ目を向けられるのか疑問です。都会であってもそうであるとは思いますが、田舎ではなおさら、教会に牧師がいて、その牧師が地域社会との関わりの中でキリストを広める働きが絶対必要であると思います。

私自身、キリストにつながる者として、小説「塩狩峠」にあったように「日常の生活の中で言ったことや為したことが遺言である」べく、毎日の田舎暮らしの中で「背中キリストを宣べ伝える」ことができればと思います。



## 出会い

武蔵野教会員 原 仁

なぜルーテル教会かと問われてもその答えは見つかりません。おそらく神様をご存知でしょうが、一生かけてもその答えに行き着かないように思います。

医者になる、なりたいとの思いはぼんやりしていましたが、受洗した高校1年ころより形になりつつありました。学年を重ねるに従って、その思いは強まったように記憶しています。やはり、なぜ医者かと問われてもその答えは見つかりませんが。

### 子どもとの出会い

子どもが好きかと問われると、やはり、答えに躊躇してしまいます。もちろん、子ども、特に子どもの発達への興味は尽きません。医学部を受験すると決めた時は、こんな医者になろうというような具体的なイメージはありませんでしたが、子どもに関わる医師（小児科医）を決意したのは、浪人時代の武蔵野教会での教会学校教師を体験した影響のように思えます。今、神学校長の江藤直純先生が大学生で、教会学校のリーダーだった頃です。当時の武蔵野教会の青年たちと同様に、教会学校に関わったことが私にとっての青春でした。振り返って見ますと、医学部学生になった時には、すでに小児科医になると決めていました。教会学校の子どもたちとの出会いが相当なインパクトになったのでしょうか。

### 佐々木正美先生との出会い

小児科医として5年を経過したころ、最初に目指した子どもの脳の病気を治す医師（小児神経科医）だけでは物足りなく、子どもの心の発達に興味に移行していきました。当時まだ養育の失敗という見方も残っていた自閉症児を脳の発達の問題として研究したくなったのです。運良く、この領域の研究がすすんでいた東京大学医学部附属病院に非常勤医員として勤務できました。この2年間の学びが、現在の専門の発達障害医学の基礎となったと思います。

同じころ出会った佐々木正美先生（高名な児童精神科医）の臨床のスタイルにあこがれました。大学病院の臨床は、絶えず研究のためという

枠のなかでのそれでしたが、先生ははっきりと発達障害のある子どもとその親の立場に立っておられました。なによりも優しい診療でした。どうしたら先生のような診療ができるのだろうと、あわよくば先生の技術を盗もうと、一時ついて回りました。今風に言えば、「追っかけ」です。

結論は、まねはできても「佐々木正美にはなれない」でした。当たり前ですが、その後は自分の臨床のスタイルを求める長い旅にでることになります。その旅は今も続いています。なお、後に分かったことですが、佐々木先生は内村鑑三の流れを汲む独立教会の熱心な信徒でした。やさしさの源はイエス様の愛があると確信するしだいです。

### 岡安大仁先生との出会い

宣教100年の記念行事の準備が話題になっていた頃、「ルーテル医療従事者の会」が発足することになりました。以前から医師としての社会活動があること（例えばキリスト者医科連盟）は先輩医師より聞かされていましたが、医師としての勤務と武蔵野教会会員としての日常で目一杯でした。参加する機会もありませんでした。しかし、医療従事者の会のリーダーの岡安先生のお手伝いをさせていただきながら、先生の静かな情熱に徐々に吸い寄せられていきました。わが身を時間で刻むような生活でしたが、岡安先生からのご依頼を受ける時は、不思議なことに躊躇はありませんでした。医学を学んだキリスト者として生きよとは神様の御指示だったのでしょう。

自分に与えられた能力と時間は限られたものです。それをどのように配分して、仕事と教会とに振り分けるのかだと思えます。どちらかがより大切とは思いません。医師としての日常と家族と参加する礼拝、そして教会役員としての奉仕は私にとって同じ価値があります。なぜかと問われてもやはり答えられません。医師として、キリスト者として、それぞれの人生をまっとうしたいと願っています。神様のお助けによって。愛唱聖句:ヨハネ15:5「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」

愛唱賛美歌:教団405「かみともにいまして」



## 「泣くものと共に泣き、笑うものと共に笑う生き方を」

小石川教会員 原田恵美

このたび、福祉現場で働く者としての証しを依頼されました。ルーテル教会にはたくさんの先輩方が福祉の仕事に携わっておられます。そのような中で、私はまだ経験が浅く身に余る思いですが、主が与えて下さった機会に感謝し、つたない証しをさせていただきます。

### 母子生活支援施設ベタニヤホームとは

私は現在、母子生活支援施設ベタニヤホームに勤めて6年目です。母子生活支援施設とは、自立困難な状況にある母子が利用する生活施設で、お母さんはそこから仕事に行き、子どもは保育園や学校に通います。保育園に入れない場合や病気になったりしたときは、施設で保育を行います。私は主に、お母さん達の話の聞いたり、制度やサービスを伝えて、母子の自立に向けて支援する仕事を担当しています。このベタニヤホームは、関東大震災の罹災母子に対して、牧師・米国宣教師がいち早い救援活動を行ったことに端を発しています。その後、エーネ・パウラスという米国婦人宣教師が中心となって乳幼児のさまざまな支援活動を展開し、長畦すめる先生が長年にわたり現場の責任をもってこられました。

### 主に導かれた私の歩み

私は、大学卒業後は外資系の化粧品会社に勤めていました。しかし、営利目的の企業のありかたと自分の生き方に何かそぐわないものを感じていたところ、当時の牧師小嶋三義先生から日本福音ルーテル社団の仕事を紹介され、そこで8年半働きました。日本に福音を伝えるために働くアメリカ人宣教師の役に立つこと、日々主の手足として働いているという実感で、私はとても充実した幸せを感じながら働きました。そのうち、私の担当でもあった難民支援の仕事を通して、対人援助の専門的な勉強をしてもっと直接人と関わる仕事をしたいと思うようになりました。

そこで、社団に勤めながら夜学に通い、社会福祉の資格をとりました。そのとき、当時の三浦謙牧師の薦めもあり、エーネ・パウラスの働きについて調べました。そのことがきっかけで、ベタニヤホームでお話を聞き、実習もさせていただき、私が昔からどこかに暖めてきた「子どもと関わる仕事がしたい」という思いと結びつき、夜学の卒業と同時に就職させていただくことになりました。

私の場合、子どもの頃から「こうなりたい」という特別な夢があったわけではなく、その時その時祈りながら開かれた道を歩んできました。それはある意味、自分が努力して勝ち取ったというわけではないので、なまぬるい人生と言われるかもしれません。しかし自分では、アブラハムが「約束の地」といってもどこにあるどんな場所かも知らずに、ただ神を信頼して故郷を離れて出発した心境とはこんな感じだったのかな、と思った事もあります。

### 「互いに愛し合いなさい」

「自立支援」の施設で働きながら、本当の自立とは何だろう？ 人間にとっての幸せとは何だろう？ 神様を求めている、けれども苦しみの中で助けを求めている人々を励ます言葉は何だろう？……そのようなことを時々考えます。答えはまだ見つかりません。ベタニヤホームに勤めていて嬉しいことは「この先生達はみんな優しい」「ここに来てよかった」と利用者の方たちが喜んでくださる事です。しかし「偽善者」と厳しい言葉を浴びる事もあります。そのようなときに思い浮かべるのは「愛がなければ……」のコリント書のみ言葉です。私には、目の前のお母さんや子ども達への愛があるかどうか問われているように思い、責任の重さを感じます。今の私は、イエス様の与えてくださった新しい掟、そしてルターの言葉「内的には行為を必要となさらない神のみ前で信仰によって、外的には信仰など役に立たず、行為もしくは愛こそ役に立つ人々の前で、人は真の意味でキリスト者である」を座右の銘にして、「泣く者とともに泣き、笑う者とともに笑う」日々でありたいと思っています。



(左側が筆者)

## 家庭に生きる一家族（夫婦、子育て）

室園教会員 俵 恭子

### 出会いの恵み

東京の女子大卒業後、母校の九州女学院（現ルーテル学院高校）英語教師として勤め始めた年に、岡山の川崎医科大附属病院で神経内科医としての研修を始めるため移転を決めていた今の夫から交際の申し込みを受けた。共に同じ室園教会で故福本秀盛牧師より、受洗、堅信をうけた青年会仲間であった。大学時代全く離れてそれぞれ異なる道を歩み始めていたので少なからぬ戸惑いを感じつつも、正直で真面目なクリスチャン青年との出会いを神様が備えて下さったという思いが確信に変わり、勤務わずか2年で新米教師を辞し、1973年5月13日、義父が牧会していた下関教会で、当時の岡山教会牧師、石橋幸男先生の司式のもと結婚式を挙げる事ができた。

以来、岡山に4年、夫が宮崎医科大学に転勤して宮崎で6年、熊本に再び転勤で戻ってきってから22年、早くも32年の年月が過ぎた。岡山で娘が2人、宮崎で息子が一人与えられ、成人してそれぞれの道を歩み始めている。良きクリスチャンのパートナーと結婚した長女は一女の母となった。一方、義母は殆んど寝たきりで認知症とはいえ、99歳の今も元気で「主我を愛す」の讚美歌を喜び、時折とびきりの笑顔を見せてくれる。また、浄土真宗の家系で本家の長男という立場にいた私の父は複雑な思いで娘の受洗も、牧師の次男である夫との結婚も承諾していたが、2人の息子たちもそれぞれ大学時代に箱崎教会で受洗し、時を経てクリスチャンのパートナーを得てクリスチャンホームを形成するに及んで聖書を熱心に読むようになった。ドイツ人宣教師との不思議な出会いと聖霊の導きがあつてついに母共々クリスチャンとなり、今は日々感謝と祈りのうちに元気に地域でのボランティア活動に励んでいる。

「主イエスを信じなさい。そうすればあなたも、あなたの家族も救われます。」（使徒書6：21）御言葉のとおり神様は、蒔かれたひとつの小さな種でさえ忘れることなく、このように豊かに育て下さったことに心からの感謝と讚美を捧げるものである。

## 結婚生活と家庭

神様の御前で永遠の愛を誓い、良きクリスチャンホームを築こうと努力する夫婦であっても、それぞれの成育環境や感性、思考方法の違い、夫や妻もしくは男性、女性としての役割意識のズレから生れる違和感、子育てに関する意見の相違などがあるため、よく話し合い聴き合うことを大切にしていかなないと、お互いの関係をそこね、親子関係にもいつのまにか深刻な影響を及ぼすことになる。互いの違いを見詰め合うだけでは、アダムとエバがそうであったように自分の正当化、自己弁護、責任転嫁の過ちに陥るのが人間の常である。私たち夫婦もいくつも同じ過ちを繰り返してきた。家庭生活は、生起する様々な出来事に対する夫婦の一致、不一致によって喜びの源にもなり、苦しみ之源にもなる。けれども、苦しみは、夫婦にとってまたとない神様が備えて下さる訓練の時となる。もし私たち夫婦の間に神様がいて下さらなかつたら、お互いを省みて許しあう機会を失い、破綻するか形だけの夫婦関係を続けるかになってしまったかもしれない。感謝すべきことに、私たちは聖書を与えられ、行く先々の教会で、礼拝の恵みにあずかり信徒の交わりに支えられてきた。3人3様の個性をもつ子供たちに対しても、親としてそれぞれにふさわしい自立のサポートが充分できたのか心もとないが、聖書というぶれない座標軸のおかげで、大切なものを大切に思い行動する力は育てられてきたのではないかと思う。

家庭は社会と直結する生きる現場そのものといえる。家族形態は多様であっても、どの家庭も、経済苦、不和、病気、事故、災害、事件、争い、老い、死などの嵐にいつおそわれるかわからない不安を抱えているし、実際、内外の様々な要因によって家族崩壊の危機(DV、虐待、離婚、介護疲れなど)に苦しむ人々は年々増加している。けれども人の弱さも苦しみも全てご存知で常に共にいて下さるイエス・キリストに希望をおいて生きる時、私たちは互いを思いやる心と課題に立ち向かう新たな力を得ることができる。主イエスの愛のメッセージが個々の家庭に届き、互いに愛し合う関係が築かれていくように祈り行動するものでありたいと願っている。



## 神様の愛

釧路教会員 あじき 安喰栄子

私は44年の信仰生活の中で「キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。」(フィリピ1:29)の、み言葉に生かされてきました。その歩みを、いただいたテーマに沿いながら、振り返ってみたいと思います。

### 焼夷弾によって受けた傷

今回の証しは「神様の愛」について書かせていただきます。

私の原点、出発点は戦争で受けた「傷」です。今でも忘れません。終戦の年の5月27日、500機のB29の襲撃で横浜は全市全滅。幼い私の目の前に焼夷弾が落下し、火傷を負い火膨れで目も見えず、母親の手に引張られてただ逃げました。15日間目も見えず過ごしました。それ以来、私の顔は火傷の後も生々しく残り、心に大きな「傷」ができました。その後、母の実家の池田で過ごしました。神様が私を池田の地に移し住ませ、池田教会の設立に、私の叔父が土地を寄付するようにと、計らってくださいました。ここから、私の教会との関わりが始まります。

浦幌で開拓伝道をしていらした故吉田康登師が池田教会の牧師になり、いつも家の前を通られる牧師夫人が、あるときこう言われました。「ヨハネ9章3節に『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである』と書いてあります」。その言葉が心に響き教会の門をくぐり、数年後に洗礼を受けました。

### 老親の介護と夫の看取り

さて、「老親の介護」ですが、釧路に嫁ぐ前に父親の面倒を看ていました。しかし、最後の一年間は入退院の繰り返しで、日曜日は必ず教会へ行きました。それが父親に対する本当の看護だったのかと、振り返って考えさせられます。まず、何よりも、人の痛みのわかる人間でありたいと思うのです。

私が51歳のとき主人が癌になり、主治医から「後5年の命」と宣告され、目の前が真っ暗になりましたが、その時も、ロマ書5章4節「忍耐は練達を、練達は希望を生みだす」のみ言葉（結婚をしたときに吉田牧

師が聖書に書いてくださったもの)に生かされました。ときには自己中心的で放蕩息子の様な現状、神様との闘いの日々でしたが、今から思えば、その分恵みもたくさんいただきました。

### 自らも病いに

主人を看取ることが全てであった私は、百ヶ日も過ぎてほっとしたとき倒れ、右肺の下葉切除の手術をしました。「よく我慢しましたね」と医者には言われましたが、私にとっては「神様が生かしてくださったからこそ」の命でした。主人の看病のときにも何回も痰に血が混ざっていましたが、「主人の命は後2年」と、ただその思いで、自分のための病院には行けなかったのです。その手術の際に、声帯横の気泡も切除しましたが、電気メスが声帯に触れて声が出なくなりました。大好きだった讚美歌も歌えず「忍耐は練達を、練達は希望を生みだす」のみ言葉にのみ力づけられる日々でした。それでも、この命を主は支えてくださったのです。

最後に、最近の闘病のことに触れます。平成15年3月のことです。私は肺炎になり高熱と座薬の日々でした。一年間の入院生活でした。退院したときに従姉妹から「献身的な医者業と信仰の力が蘇らせてくださったのですね」と言われ、その言葉に熱いものを感じました。闘病中に、「神様は今、私を生かそうとされている」「この体は、神様からいただいた身体なのだ」と気づき、命は神様に、治療は医者には。私は生きる意欲を持つこと、まず食べることから、と根性で食事をしたのです。

こんな歩みをたどってきた私ですが、神様は私を必要とされているから、今現在こうして神様の愛のうちに、何のいさおもないこんな私を包んでくださっているのだと、日々感謝の思いです。

「生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられるのである」(ガラテヤ2:20)。今は、この言葉をしっかりと噛みしめて歩んでおります。



## 家族に引き継がれた妻のいのち

武蔵野教会員 田坂 宏

### 死に逝くための準備

1992年、妻の祥子が胃がん末期の最期を42日間の在宅ホスピスケアを受けて49才で天に召されました。家族は私の他、24才の長男、23才の長女、15才の次女がいましたが、その期間、家で全員が看取りに参加し、次女を除いた4人が最期の別れの場にも立合いました。

祥子は亡くなる7日前、家族を集めてすばらしい別れの言葉を一人ひとりに残しました。それは、訪問看護師の田中さんが、「これからの時間は、死にゆくための準備をすることに使われたらどうでしょう」と示唆を与えてくださったからでした。それは、言葉を残すということを超えて、祥子のいのちを家族の皆に引き継ぐことでした。引き継ぐ中身は、単なる身体的生命という時に使う漢字の「命」ではなく、全人的生命をいうときに使うひらがなの「いのち」であって、精神又はスピリットともいえるものです。この大仕事をなし終えた祥子は、皆に「至福の時を過ごすことができました」、私には「あなた、ありがとう」という言葉を残して旅立っていきました。

### 「いのち」を受け継ぐ

「私は死んだあとも皆の輪の中において皆を見守ってゆきたい」というその時の言葉を受けて、祥子が亡くなった後、家族の皆は次々にその時言われたことを実行して、祥子の「いのち」を受け継いでいきました。

長女めぐみは2年後、就職先の先輩の男性を私に紹介して「結婚したい」と言い、次の年に結婚して、4年後の祥子の召天日の翌日、女の子が生まれました。その後、下の女の子も生まれ、祥子の血を継いだ2人の孫ができました。2人の孫は幼児洗礼を受け、キリスト教の小学校と幼稚園に行っています。

長男信之は、祥子の亡くなる前から交際し「この人と結婚してほしい」と祥子が言っていた友人と5年後結婚して、めぐみの下の子と同じ年に、女の子が2人の間に生まれました。信之は、祥子の最期の時に大学院で「がん診断の正確度を増すための研究」をしていて、祥子もそれ

を喜んでいました。その2年後、将来進む道を選ぶに当たって、GE横河メディカル・システムという医療機器製造会社に入社したいと言い、良い医療機器を開発して社会に貢献したいと私に告げました。それを聞いて私は感激しました。

次女の美地は、祥子が別れの言葉の中で望んでいた堅信礼を受けることを決心し、3年後の高校3年に堅信しました。その時の感想文に「堅信した今言えることは、何があっても神様を信じて全てを委ねて生きていこうと素直に思えるようになりました。それが私の中での大きな変化であり、喜びとなっています」と書いています。祥子が生涯をかけて得た神様からの答えであった「すべてを神様に委ねる」ことが、美地の心の中に受け継がれました。「信仰の継承」は「いのちの継承」であると言えます。

そして私は、13年後に祥子が私に呼びかけたかのように、祥子の召天の日と同じ連休明けに、祥子の主治医・担当ナースであった川越厚先生夫妻からの呼びかけに応じて、在宅ホスピス協会という在宅ホスピスケア普及のための団体で働いています。それは、在宅ホスピスケアが、いのちの終わりを人間の尊厳をもって最後まで生き抜くことができる可能性を持っていることを、看取る側の体験を通じて知ることができたからです。

### 家族全員での看取り

在宅での看取りの良いところは、家族が全員で最期の看取りに参加し、死ぬまでの過程を目の前で体験して、子どもたちが母親のために何をすればいいかを考えて行動するようになり、優しい気持ちになれて家族の団結が増し、それがその後も続いていること、また、悲しみが後にひかず精一杯やったという満足感が患者と家族全員に残ることです。そして、祥子は今でも皆の心の中で生きています。

在宅ホスピスケアで祥子の死を看取ったことは、42日間だけのことではなく、その後の私たち家族全体の将来を左右する大切なものが与えられ、家族が死にゆく者の「いのち」を受け継ぐことができたと感じています。



## 感謝の日々

挙母教会員 中本秀行

### 神様からの贈り物

1986年8月、私たち夫婦に待望の女の子が授けられました。しかし、彼女は知的障がいを持って、この世に生まれてきたのです。私は何かの間違いではないかと、この現実を受け入れられず、苦悩の日々を送っていました。そんな中、主は言われました「私の恵みはあなたに対して十分である」「あなた方の会った試練で、世の常でないものは無い。神は真実である。あなた方を耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、逃れる道も備えて下さるのである」。このみ言葉が私の心を捕らえ、次第に受け入れることができるようになりました。

### 共に生きる

娘が11歳になるころ、ルーテル元町教会（現ルーテル挙母教会元町礼拝所）に隣接する宣教師館が空き家になっており、それをお借りして、仲間の親御さんたちと、社会参加と自立を目的とした訓練の第一歩を踏み出しました。その後、礼拝堂の使用も認められ、宿泊訓練、サマースクール、ホリデーサービス等を行い、また教区主催の堅信キャンプへの参加もさせて頂き、様々な体験を積んで行きました。当時は、活動費すら持てなかったのですが、教会の陰の助けと祈り、そして多くの方々の善意と奉仕により続けていくことができました。しかし、一方ではキリスト教会の場をお借りした活動になじめない方もおられ、離れていく人もいました。この様な時に、ただ祈ることしかできない無力さを感じながら、でも、しかし、だからこそキリストの香りのする愛を伝える働きをしていかなければと強く思わされました。

### 名称と理念

「はっきり言うておく。私の兄弟であるこの最も小さい者のひとりにしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」「わたしの目にあなた

は高価で、尊い、わたしはあなたを愛している」このみ言葉から、小さく弱い立場にある一人ひとりを大切に、尊い命の使命を輝かせて欲しいと言う思いを理念とし、会の名前を「スモールワン」と名づけました。

## 法人取得

2004年12月25日、クリスマスの夜、法人申請を県に受理して頂きました。翌年4月、任意団体スモールワンは、「特定非営利活動法人(NPO) スモールワン」として新たなスタートを切りました。当初はとても無理なことだと思われたのですが、これも神様のみ業によって、成されたことです。

## 感謝

私の娘は2005年3月に養護学校を卒業したものの、予想通り行き場もなく、このスモールワンのデイサービスに通うことになりました。神様はきちんと時を合わせて、働いてくださったのだと、感謝で胸がいっぱいでした。しかし、娘にとってその場所は、幼少の頃から通っている場所で自分の庭の様なものでした。<sup>わがママ</sup>我儘になりはしないだろうかという思いもありましたが、職員、スタッフに支えられ、毎日仲間たちと今も元気に通っています。

主の導きによって成長させられたのは私でした。「全てのことに感謝しなさい」という言葉をようやく理解したのです。神様の導きに感謝しつつ、これからもキリストの教え、愛を、活動を通して伝えていけたらと思います。



## 山谷の小父さん達と共に

市ヶ谷教会員 赤間峰子

### 山谷との出会い

13年前の6月、私は生まれて初めて「山谷」というところへ行きました。山谷というのは地名ではなくて、台東区清川あたりの通称であることは、後になって知りました。狭い2Kのアパートで10人近い方々が100個弱のおにぎりを握っていらっしゃいました。同じ教会の友人が声をかけてくださって、何の準備も知識もなく、好奇心だけで伺ったのですが、私はその日から、毎週火曜日になるとそこへ行かずにはいられなくなりました。すぐ近くの玉姫神社の境内には、おにぎりを待つ方の行列ができていました。機関紙「るうてる」などで、大阪の釜ヶ崎のことは知っていましたが、実際に東京の山谷へ足を踏み入れたのは、このときが初めてでした。

### 現在のほしのいえ

「ほしのいえ」は、その後何度か場所を変えましたが、活動は変わらず、現在では600個前後のおにぎり味噌汁を配っています。ルーテルの方の参加者も増え、11時頃から3升釜で7回ご飯を炊くのは、ほとんどルーテルの方々です。ルーテル関係の連絡のために「ほしくずの会」ができました。

列を作っていくつかの公園で待っておられる方は、いつも大きな荷物を持って、雨の日も雪の日も来られます。あまり高齢の方や病気の方は見かけません。そこまで来られるのが大変なのでしょう。女性もたまに見かける程度です。夏でも夜半は冷え込むのでしょうか、たくさん着込んでおられます。私たちは、もっとゆっくり話を聞かせていただきたいのですが、小父さんたちは、おにぎりを受け取ると、静かに帰って行かれます。屋根のある商店街などで寝る場所を確保するためです。

### 〇さんの帰郷

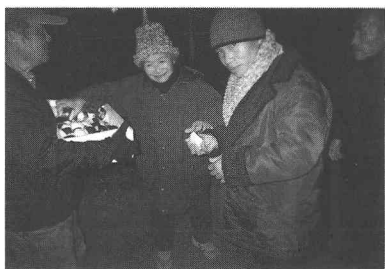
〇さんは鹿児島出身です。一昨年、彼を訪ねてお兄さん夫婦が上京さ

れました。彼はとても喜んで、宿泊先のホテルで語り明かしたようです。お兄さんは90歳近い高齢で、彼を迎えにいらしたらしいのですが、彼は東京にとどまりました。その後、私たち支援者3人と一緒に鹿児島へ行きました。聖書の放蕩息子の話のように、親戚の方々も集まられて大歓迎でした。それなのに、私たちが帰京するとき、彼も一緒に東京へ戻ったのです。今さら、という気持ちもあったのですが、彼は亡くなったお父さんの遺産を受け取って、東京のアパートで一人暮らしを続けています。時折、ほしのいえのボランティアたちにおやつを差し入れてくれますが、彼も80歳を越し、そろそろ帰ることを考えた方が良いのでは、と私たちはヤキモキしています。でも、これは珍しい幸せな例です。

神様は、この方々一人ひとりをいつも見守ってくださって、私たちは、そのお手伝いをしているのだと思います。私も健康の続く限り、山谷へ出かけて行きます。

好きな聖句はヨハネ福音書3章16節です。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」



## 地域社会に生きる—保護司として—

健軍教会員 加藤俊鋪

### 立ち直りを支えるボランティア

熊本市を八分割したその一つが、私の所属する熊本地区保護司会第八分会です。平成2年11月に任命を受け、今年で16年になります。平成16年度の分会総会で会員の総意で分会長に就任し、同時に熊本地区保護司会理事と協力組織部長を拝命しました。

保護司は、犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支えるボランティアです。その主な職務は、保護観察を受けている少年や大人の指導。刑務所や少年院に入っている人の帰住先の調整を行う環境調整。犯罪予防活動として、子どもの犯罪の増加により、小中学校との連携にも力を注いでいます。これまでに扱った保護観察は、窃盗、住居侵入、シンナー、暴行、無免許運転、詐欺、覚醒剤、婦女暴行未遂、万引き、ひったくり、器物破損等の対象者です。「罪を憎んで、人を憎まず」という言葉を、保護司として最初に教えられました。それと同時に、私はキリスト者として、愛唱賛美歌の一つである「むくいをのぞまでひとにあたえよ……」この賛美歌の心を忘れることなく対象者に接しています。

### 少年院や刑務所から

保護観察の一つで、少年Aは中学校の部活で担当職員から、意見の食い違いで殴られ、その腹いせに校内の器物破損を行いました。短期保護観察となり、保護観察中に友人に誘われひったくりの現行犯で警察へ、そして少年鑑別所に入所しました。保護観察所から連絡を受けた私は、数日後、鑑別所に面会に行きました。鍵の掛かる部屋に通され、顔を合わせたときには、にっこり笑ってくれました。テーブルをはさんで向かい合い、話しかけ、「先生ごめんなさい」と、ぼろぼろ涙を流して反省した姿を見たとき、これは更生できるなと感じました。その後、少年院に入院し、本人から毎月手紙が来て、そのつど返事を書き、また本を贈って励ましました。出院後の生活について、本人の母親と何度も会って話し合いました。1年1ヶ月間、少年院での厳しい生活で、心身ともに

成長して出院し、現在は兄の働く職場で頑張っています。仮釈放で保護観察となった人と、職探しに行ったこともありました。

環境調整では、刑務所に入所している人が引受人を指名しますと、保護観察所からの指示により引受人の所に出向かなければなりません。私が行ったとき、引受人の母に通された座敷で見たものは、床の間に置いてある5本の日本刀でした。とんでもないところに来たかと、内心ぞつとしました。後で分かったことですが、引受人は暴力団の組長でした。「その男は今度引き受けると3度目たい。覚醒剤はなかなか直らんもんな」と言って、引き受けることを承諾してくれました。

### 喜びも裏切られることも

対象者が立派に更生した姿を見ると、保護司として一番の喜びですが、裏切られることもあります。更生には本人の努力だけではなく、家族の協力、友達関係、地域社会の温かい見守りが必要です。保護司の役割は、ほんのその一助に過ぎません。

私が子どものときは、縦社会の子ども集団の中で、近所の兄ちゃんがリーダーとなって遊んでくれました。そして、やって良いことやいけないことも教えられ、社会的な知恵が付きました。悪いことをして叱られるのは、遊んでくれる兄ちゃんの方が、親より効き目がありました。今はどうでしょうか。そんな姿はほとんど見かけません。他人の子どもを叱ると、その保護者から逆に文句を言われます。そのようにして育てられた子どもは、善悪の判断が付き、犯罪を犯すのです。昔のような縦社会の子ども集団ができると、素直な子どもが育ち、犯罪も減るのではないのでしょうか。

「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」。いつもこの愛を持って対象者に接し、更生保護事業に携わっていきたいと思います。世の中から犯罪が減り、安心して暮らせる明るい社会になることを願っています。



## 神と人に仕えるために

釜ヶ崎ディアコニアセンター 喜望の家 森本典子

### 「差別」は身近なところに

「差別」という言葉に出会ったのは、小学校3年生のときである。私が通っていた小学校には、比較的大きな被差別部落が校区に存在しており、そのためいわゆる同和教育が熱心に行われていた。当時は、家に帰ると「部落の子どもたちとは遊んではいけない」と諭され、学校では「被差別部落出身の人たちだからという理由で人を差別してはいけない」と教えられるという、たいへん両極端なメッセージに翻弄されていた。この相反する価値観に子どもなりにどうにか対処していかなければならなかった。そのとき私を支えてくれたのは、イエス・キリストの言葉だったように思う。両親はキリスト教徒ではないが、一番近くにあった教会付属の幼稚園にわたしを入園させた。その後、教会学校へとつながっていったときも毒にはならないだろうと思っていたようだ。そんな教会学校で、よきサマリヤ人の譬やパンと魚の奇跡の話聞き、どのように人を見るか、人と接するかを学んだ。権威のある人が正しいことをするとは限らない。差別されている人だからといって、その人のすることに価値がないとは限らない。自発的に人を支援するということの大切さ。たとえわずかなパンでもみんなで分ければ豊かになれるということ。人を思いやるという行為の上には神の祝福があるということ。しかし、それと同時に、善良な人たちと近隣から評価されている両親があからさまに差別の言葉を口にするのを目の当たりにし、その両親から聞いたことが心の底に染み付いている自分自身の内面に気づいたとき、また、身近な人が立場の弱い人を低く評価することを耳にしたとき、どのような人間にも差別する気持ちがあるということも学んだ。だから、私は今でも「私は差別しない」という人を信じない。

少し成長すると世の中には「差別」と呼ばれる事柄がたくさんあることがわかった。10代後半から20代前半のころ、国内では在日外国人の「指紋押捺拒否」運動が盛んであり、海の向こうでは、アパルトヘイトに対する反対運動が起こっていた。このような運動にかかわっていく中

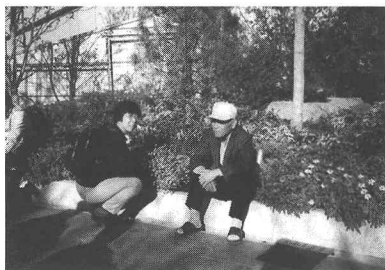
で、女性が周縁化されているという事実にも気づいた。「社会派」と呼ばれる男性たちは、あらゆる「差別」に対して果敢に立ち向かっていくように見えたが、自分自身の差別性には気づいていなかったようである。同じ活動をしていても女性は仲間にはなりえず、自分自身が差別される対象であったことに気づき愕然とした。

### 釜ヶ崎との出会いはディアコニアとの出会い

このような発見と前後して、釜ヶ崎とストロームさんに出会った。釜ヶ崎は日雇い労働者の街である。その街で、アルコール依存症になり、野宿を余儀なくされている人々のために「喜望の家」を自力で設立したストロームさんの話は強烈だった。「結婚せずに自分の一生をディアコニアの働きにささげようと思う人はいませんか。神と人にとに仕える人になりませんか」。神と人に仕えるにはどうすればいいのか。ディアコニアに自分の人生をささげるってどんなことだろう。当時高校生だったわたしには、そんな大きな人生の決断をすることはできなかったが、ディアコニアという言葉はわたしの心に焼きついた。

大学を卒業して就職したのは喜望の家だった。就職活動を前にして、釜ヶ崎で働くことができると願っていた。神様が道を備えてくださったに違いない。更に、縁あって、デンマークへ行き、そこでディーコンとして接手を受け、教会で働いた。ストロームさんと出会い、神と人にとに仕えるとはどういうことなのかを目の前にしてから15年以上が経っていた。

振り返れば、学生時代を除き差別と戦ってきたという思いは特にない。神と人にとに仕えたいと願っただけである。その思いに神様は多くの小さなきっかけを与えてくださった。神様からインプットされた恵みをアウトプットするきっかけを。



## Go, Go in Peace! A mysterious hand will guide you.

聖パウロ教会牧師 松木傑

タイトルの言葉は、同志社大学の創立者新島襄の言葉です。

### 四条河原町、高島屋前の街頭募金

学生センターに出かけたことがきっかけで修学院教会に導かれました。当時、アフリカのピアフラの飢餓の問題が、新聞、テレビで取り上げられ、京都の三教会の青年会は高島屋前で街頭募金を行いました。募金は日本キリスト教協議会（NCC）の奉仕部に送金され、世界教会協議会（WCC）を通して現地の救援に当てられました。同じ世界に生きる恵まれた私たちは、何かすべきであると、その時強く思いました。このことが国際協力の働きを始めるときの原点にあります。

### アジアの現場で学びたい、しかし計画は頓挫

アジアの現地に出かけて状況をつぶさに学びたいと思い、WCCの留学生候補としてインドやフィリピンの大学や機関に当たってもらいましたが、受け入れ先が決まらず、ルーテル世界連盟（LWF）のプログラムで、インドネシア、スマトラのバタックの教会の大学で奉仕することが決まりました。しかし、今度は入国のビザが取れなく、思いが実現しないまま、1975年別府教会の牧師に赴任し、4年後、福山教会に移りました。

1982年は、核兵器廃絶の運動が盛り上がった年でした。被爆体験を世界に伝え、平和を作り出すため、広島平和セミナーを開きました。84年のセミナーは、LWFから財政支援を受け、海外から代表を招くことができましたが、インドネシア教会の代表として、私が行くはずであったバタックの大学の学長が出席されたのです。

### 広くて、狭い教会の世界

1986年日本キリスト教協議会に招かれ、平和、国際協力、奨学金などを担当することになりました。高島屋前の街頭募金の献金の記録も何と

20年後にも残っていました！

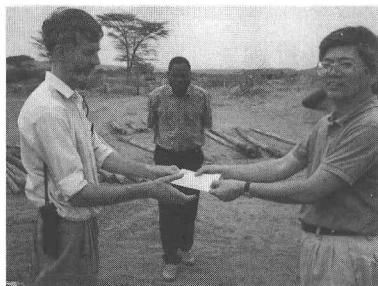
奨学金を担当しての感想は、チャンスは一杯あるが、掴もうとする人が少ないということです。「求めよ、さらば与えられん」は真実です。しかし、求めないことには、与えられない、というのも真実です。

### 宣教100年記念事業のチャンス

1993年は、宣教100年。東教区では、自己研修制度をつくり、旅費など支援してくださいました。私はさっそく、援助活動とフェアトレードについて学ぶためアメリカ、ドイツ、LWFを訪問することにしました。ドイツの訪問先の一つが、「教会開発奉仕協会」でした。責任であるクンツ博士から、当時準備段階であった、コーヒーにフェアトレード・ラベルを貼る運動を紹介されました。その後、このフェアトレード・ラベル運動は、ヨーロッパ、北米と広がり、途上国の生産者を支える大きな運動に発展しています。(日本での働きは、「NPO 法人フェアトレード・ラベル・ジャパン」(www.fairtrade-jp.org)、事務局は聖パウロ教会内)

また、1992年はソマリアの内戦とそれに伴う飢餓が大きく取り上げられた年です。私は早速、LWFの救援物資の空輸活動に参加することにして、新聞でアピールしてもらうことにしました。これが援助活動としての、「わかちあいプロジェクト」(www.wakachiai.com)の始めでした。それからケニアの難民キャンプでのワークキャンプなど様々なプロジェクトを実施してきました。

私は教会生活40年間の人生を顧みて実感しています。Go, Go in Peace! A mysterious hand will guide you.は、私においても真実であったと。



(右側が筆者)

## 石居基夫

1959年生まれ。東京都立大学人文学部人文科学科教育学専攻卒業 日本ルーテル神学大学（現ルーテル学院大学）神学部、日本ルーテル神学校卒 米国 ルーサー神学校博士課程修了、Ph.D 神学博士。日本福音ルーテル武蔵野教会にて牧会。現在ルーテル学院大学総合人間学部キリスト教学科助教授、日本ルーテル神学校助教授。

---

# LAOS 講座 第8号 この世を生きる —キリスト者の生活—

発行日 2006年5月1日  
編集者 PM21 第2プロジェクト「証し・奉仕する信徒」委員会  
委員長 齋藤末理子  
著者 石居基夫  
発行者 「日本福音ルーテル教会宣教方策21」(PM21) 推進委員会  
宣教室長 推進委員長 徳弘浩隆  
発行所 日本福音ルーテル教会 宣教室  
印刷所 精文堂印刷株式会社

---



